

華扇 「はい。外の世界からはるばるよく来てくれました。
このツアー代表の茨木華扇よ。」

早苗 「早苗です。皆さんには、これから幻想郷の女の子達を
孕ませるために、たくさんセックスしてもらいます♡」

霊夢 「これも幻想郷のためだから、遠慮なんかしないで
好きな子と種付けを楽しんでいってね。」

華扇 「でも、まずは私達の相手をよろしく願いしますね♡」



「それじゃ、私とシたい人は並んでね♡
好きただけ膣内射精しちゃっていいから、みんなの精液で
お腹いっぱいにしてちょうだい♡」
霊夢がそういうや否や、すぐに行列が出来た。
皆獣のように飢えた目で、陰莖をギンギンに勃起している。
霊夢は自慢の賽銭箱にもたれ掛かり、お尻を突き出し
スカートを持ち上げる。皆の一物をすぐにでも啜えるため、
当然のように履いていなかった。男たちにキレイなスジが
丸見えになる。





男の一人が我先にと飛び込み、早速霊夢に挿入した。

「いっつぱい気持ちよくしてあげるからね♡」

霊夢はにつこりと笑い男の一物を膣の奥まで受け入れると、

男が動きやすいよう体勢を整え、身を任せた。

男はすぐにピストン運動を始め、霊夢の小さめの身体が

ガクガクと揺れた。

「あ♡あ♡♡♡♡♡」

すぐに霊夢の体の奥から勢いに任せ息が飛び出る。

結合部からは愛液が混ざり合う下品な音が響いた。

間もなく男が達し、小さく痙攣しながら霊夢の子宮にどぶどぶと精を解き放った。

「ふっ♡んん……♡」

霊夢も射精の勢いに軽い絶頂を覚え、身をよじる。

男はそれでも足りないかと、もう一度霊夢の奥まで肉棒を入れ直し、尿道に残っている全ての精液を出し切った。

「ん……ふう……♡……気持ちよかった？」





男が満足して男根を引き抜くと、霊夢の割れ目は閉じきらず、そこから男が大量に出した精液がトロトロと漏れ出した。

「いけない。次の人早く来てちょうだい。」

せっかく出してもらったザーメンが出てっちやうわ。」

その言葉に、次の男が駆け寄り、霊夢のドロドロの膣に陰茎を突き立てた。



「それじゃ、あなた達はまずはしっかりと女の人の身体を勉強しようね♡」

華扇はツアーの代表として、童貞達の筆下ろしを担当していた。

大きく足を広げ、自分の女陰を惜しげもなく晒す。

女を知らない男たちは、目の前の女がそんな姿をとっているのを見ただけで、興奮し、中には怒張した自分の一物をしごき始める者も居た。



「ここがクリトリス。ここが尿道。そしてここが、
今からあなた達が使う場所。膣になります♡
さあ、あなたの手で広げてみてください♡」
華扇は一人に指示を出し、自らの秘所を広げさせた。
雌の匂いが辺りに充満し、男たちの興奮を更に掻き立てる。
「そして奥に見えているのが、おまんこの一番奥。
子宮口になります。この中にたくさん
ザーメンを注ぎ込むんですよ♡」



「では、そろそろあなたのおちんぽ♡いただきましょうか♡」
華扇が自分の秘所を広げている者へ誘いの言葉をかけると、
男はすぐに華扇の穴に挿入を始めた。
男のものは既にゲギンギンに怒張しており、降りてきていた
子宮を奥の奥まで押し上げる。
「んんっ♡よく出来ました♡童貞捨てられましたね♡
えらいえらい♡」
華扇は子供をあやすように優しく微笑む。



しかしその声色には淫靡なものが混じっていた。
男を受け入れ種付けを待つ雌の声。

ソレに誘われ男はすぐにピストン運動を始めた。

「ん♡ん♡ん♡上手よ♡いい子♡いい子♡」

近くで囁かれ、男の興奮は際限なく増していく。

先走り汁が膣を覆い、すぐに結合部からぐじゅぐじゅと
汚い水音が漏れ出した。

「さあ、ぴゅっぴゅっぴゅっぴゅっぴゅっぴゅっ♡」



その言葉に我慢できず男は思い切り精を吐き散らした。
痙攣する男のモノから濁濁と精液が注ぎ込まれる。
(やっぱり童貞は良いわね♡キラキラしてて、
種付けに遠慮がなくて♡孕ませるのに必死で♡)
華扇は満足そうに全てのザーメンを受け入れると、
「はい♡脱童貞で初種付け♡よく出来ましたよ♡
私の子宮、あなたのザーメンで暖かいです♡」
そう本心からの言葉を伝えた。



男がチンポを引き抜くと、どれだけ精を吐き出したのか
ゴポリと音を立てて膣内から精液がこぼれ落ちた。
「さあ♡お次の童貞さん、私の膣内へどうぞ♡
みんなちやあんと筆下ろししてあげますから、
安心して私を使ってくださいね♡」
本当に中出ししても良い事を知った童貞たちは、
我先にと華扇のそばに飛び寄っていった。



「は〜い♡ここは早苗ちゃんのザーメン飛ばしの
コーナーですよ！
あなたの精子をぴゅぴゅつと飛ばして、私のオナホ穴に
入れちゃいましょう☆
遊び感覚で女の子を孕ませられますよ〜♡」
早苗は凄い事をやっていた。おおよそ常識的には考えづらい
方法で孕もうとしていた。男たちは困惑しながらも、
早苗の肢体に負け、自分の一物を取り出していた。

「そうそう！直接入れちゃダメですよ♪
皆さんそこでシコシコやって、私の穴にホールインワン
してくださいね〜♡
一番上手に入られた人は後で私からサービスが
ありますから、頑張ってくださいね〜☆」
なんとなくサービスという言葉に釣られて、
男たちのしごいている手が速さを増す。
間もなく大量に飛んでくるザーメンの事を想像し、早苗は
期待に満ちた表情をしている。



そして男たちの劣情の塊が早苗に降り注いだ。
白く粘ついた精液がこれでもかと早苗の身体を汚していく。



「あはっ♡すごい臭い♡♡」
性の捌け口とされた早苗が嬉しそうな声を上げる。
早苗の身体は最早精液で全身デコレートされており、
綺麗だった裸体は、下品な肉便器に成り果てていた。
幾分かの精液はちゃんと早苗の膣に命中しており、
テープで子宮口までくぱっと開かれた膣内を満たしている。
「いっぱい入りましたね♡♡
ちよっと待ってくださいね♡今飲んじやいますから♡」



早苗はそう言うと、器用に精液を子宮口から「飲み込んで」いく。

ごぼりごぼりと音を立て、精液が早苗の子宮に収まっていく。自分たちの精液がそうやって女の体内に入っていく光景に、男たちは抜いたばかりだと言うのにゴクリと生唾を飲み込んだ。

「さ♡第二陣、行っちゃいましょう！」

どなたの精子で孕むか、楽しみですね♡」
男たちは再び自分のモノをしごき始めた。





靈夢の膣はすっかり性液まみれとなっていた。
何人もの男に犯され、子宮内は既にパンパン。
それでも靈夢は男とまぐわい続けていた。
「はい♡いっぱい出せましたね♡次の人どうぞ♡」
本日二十四本目の男根が靈夢の膣内に挿入される。
もはや作業のように行われる挿入・ピストン・種付け。
靈夢は今完全に性処理を行うためだけの
肉便器だった。



「もう他の人のでいっぱいになっちゃってますけど、遠慮なく中出ししちゃってくださいね♡」
男は全然遠慮していない。ただ目の前のメスに種付けするためだけに腰を打ち付けていた。そのたびに子宮から溢れ、膣内を埋め尽くしている見知らぬ男の精液が、汚い音を立てて膣から飛び出してくる。
やがて男もラストスパートをかけ、そのまま無責任に射精し、子宮の奥へと流し込んだ。

「っ♡……ふう♡お疲れ様でした♡
たくさん入れていただいておりますがとうございました♡
これからは自由時間ですので、里に降りて好きな
女の子とセックスしてもらって大丈夫ですよ♡」
一見とんでもないことを口走っているが、この幻想郷での
ルールはそうなっている。外の血を定期的に入れなければ
ならないという紫の指示である。なので外の人間を
攫ってきては、こうして乱交パーティーを
開いていたのだった。





霊夢は幻想郷の要なので早急に次世代の子を産まねばならず、故に幻想郷に連れてきた男全員とまぐわう事と決まってきたのだった。

大量の精液を膣から漏らしながら、

「流石にこれで孕んだかしら？」

とつぶやくが、幻想郷にそれを知るための機器は無い。

「河童とかに頼んだらそういうの作ってくれそうだけどね」と、一瞬そう考えるが、

「まあいいか。一月ぐらい続ければできるでしょ。」
考えを適当に打ち切り、お茶を飲みに行った。

ようこそ♡
プリズムリバーの
握手会へ♡

お礼に、今日は
私達がいろいろ
サービスして
あげちゃうからね♡

いつも私達を
応援してくれて
ありがとう



さあ、
みんな並んで〜！
一人ずつ来てね♡

私達の身体の
どこと握手しても
いいからね♡

存分に愉しんで
イってよね♡



は〜いこんにちは♡

貴方はどんな

「握手」を

ご希望かしら？

いらっしやい♡

もうギンギン

じゃない。

握手する場所は

私の膺で

いいかしらっ♡

胸でもおまんこでも

遠慮はいらないから

どんどん

来ちゃってっ♡

はい「握手」♡

いつも応援してくれて

ありがとう♡

私の臆内なかでいっっぱい

気持ちよくなってる♡

君は童貞だったの？

良かったね♡

私で卒業だよ♡

ついでに初中出しも

やっちやいな♡

そう、私に

種付け

したかったの♡

いいわよ♡

存分に出して

イってね♡



は〜い中出し♡

沢山出したわね♡

どうもありがとう♡

これからも

応援してね♡

おっ、出たわね♡

初中出しおめでと♡

これで立派な

男の子だね♡

ん♡しっかり
精子が子宮に
入ってるわ♡

種付けしてくれて
ありがとう♡
またしようね♡



さあ次の人どうぞ♡
ここに居るみんな
ハッピーにして
あげるからね♡

私達全員に
種付けしちゃっても
いいからね♡

終わった人も
また並び直して
いいからね♡



はい♡
おまんこ♡
出してね♡

貴方は私をオナホに
したいの？
いいよ♡
オナホまんこに
握手してね♡

貴方も中出し
希望なの？

構わないわ♡
好きに使って
ちょうだい♡



んっ♡子宮の中に

精子いっぱい♡

ハッピー

ハッピーね♡

オナホまんこは

どうだった？

また使いたかったら

後ろに並んでねっ♡

沢山出したわね♡

無責任種付け握手

お疲れ様♡



貴方も膣で
握手するの？

みんな好きね♡
はい♡どうぞ♡

しっかり受精して

あげるから♡

みんなの精子で

子宮いっぱい♡

みんな種付け
希望なのね。

大丈夫。みんなの
精子は全部
受け止めて
あげるから♡





数時間後

みんな今日は
たーくさん種付け
してくれて
ありがとうね♡

誰の精子で
受精するか、
楽しみだね♡

お腹の中が
精子で
パンパンだわ♡



握手会は
毎週やるから、
またみんな種付けに
来てね♡

またおちんぽ
よろしくね♡
待ってるよ♡

私達3人は
もうファン達の
肉便器だからね♡





おしまい



「今日の早苗ちゃんは種付けプレス体験会ですよ♡
皆さん一度はやってみたいありませんか？
女の子を組み伏せて獣みたいに種付けして孕ませる…。
そんな種付けプレスが今日は私でやり放題♡
さあ、誰でもどうぞ♡」
足を下品に広げ、男を誘う早苗。身体にはまるで店の
広告紙のようなウリ文句の落書きまでしてあった。



「今ならだいしゅきホールドもついてますよ〜♥
どなた様のお精子もがっちり逃しません♥
みくんな私の子宮がごつくんしちやいますからね〜♥」
売女でもこのような事は言わないであろう台詞を、早苗は
スラスラと、満面の笑みで言っていく。
近くに居た男はそのあまりの気軽さと、目の前の光景のギャップに
興奮を感じて、吸い寄せられるように早苗に覆いかぶさった。

男が早苗の膣に男根を挿入すると、早苗は足を男の背中に回し、男根が膣から抜けないようロックした。

先程言っていただけいしゅきホールドとやらである。

背中を押され、男の男根は早苗の奥深くまで一気に突き刺さった。

「は〜い♥子宮口までご到着です♥どんどん突いてくださいね♥」

男は言われるまま、早苗の膣を堪能する。先日あれだけ男を受け入れていたとは思えないほど、早苗の膣は男を締め付ける。





「もっと勢いつけて♥ガンガン突いてくださいよ〜
せつつかくの種付けプレスですから♥

「おまんこ壊れちゃうぐらいヤっちゃいましょう♥」

男は締め付けの気持ちよさにうめき声を上げながら、勢いよく

早苗の膣に腰を打ち付ける。ぱんっぱんっとお気味よい音が

鳴り響き、早苗はその衝撃で大きく身体を揺らせた。



「いいですよ♥お上手です♥そのまま一番奥まで突っ込んで
びゅびゅ〜って出しちゃいましょう……ね♥」
早苗は男の射精するタイミングを見計らって、足の押さえつけを
急に強めた。男根はそのまま早苗の子宮口の中まで入り込み、
子宮内で大量に射精する。ほとぼしる快樂で男の体がビクビクと
痙攣し、男は溜め込んでいた精液を残らず早苗に流し込んだ。

男が早苗から身体を離すと、

「種付けプレスとだいしゆきホールドはご満足いただけましたか？

またのご利用、お待ちしておりますね♥」

と、子宮口から溢れた精液を垂らしながら、早苗は男を見送った。

「ふふふ♥作戦は成功ですね〜♥これなら絶対霊夢さんにも

負けやしませんよ！信仰も子宝も、全部戴きです！

さあ！お次はどなたですか〜？」



早苗は外から来た人間なので別格、里の男とも交わっても良いのだが、敢えて外の人間との交合を望んだ。霊夢になんとかなく対抗意識も持っていたのもあるが、今回連れてこられた男たちは、特別霊力などに優れた者たちだった。その種を利用する事で守矢が更に反映することを狙っていたのだ。そして何より、大勢の見知らぬ男達とセックスするのが好きであった。





昨日からを含めると、最早何度目になるか分からない膣内射精を
されながら、早苗は今さつき初めて見て自分を犯した男を眺めた。
美形であろうと醜かるうと、変わらず自分を孕ませるため、
誰もかれもが腰を振り射精していく。その様に有る種の征服感の
ようなものを感じ、早苗はうっとり目と目を細めた。
「ふふ♥たくさん出しましたね♥私の膣はどうでしたか?♥」



男はあまりの快感にぼんやりしながら、ふらふらと去っていった。
早苗の前には男たちが行列を作り、男根をいきり立たせながら
待ちに待っていた。この男たちも自分が全部食らい付くしてやろう。
そのような癡猛な気持ちになりながら、自然に出る笑顔を見せつけ、
「さあ♥お次のかた、どうぞ〜♥」
男の男根を啜えこんだ。



おしま

「あなた、大丈夫？」
そんな声で目を覚ました。
目を開けると、2人の女の子が
自分を心配そうに見つめている。
ぼんやりとした頭で状況を
整理する。

そつだ。崖から足を滑らせて……

「随分とケガをしているわね……」
とりあえずまずは手当てね。
穰子、うちまで運びましょう。」
「がつてん！」
2人の少女は頷きあうと、
男の自分の身体を軽々と持ち上げ
空を飛んだ。



「はい！あ〜ん♡」
穰子と呼ばれた少女が俺の口にお粥を運ぶ。
その顔はなぜかとても嬉しそうで、
なんだかこちらも気分が良くなってくる。
身体が栄養を求めているのか、
それとも穰子の味付けが良いのか、
お粥がとても美味しく感じ、夢中になって
がつついた。



「おいしい？いやあく嬉しいわ〜♡
自分で育てたお米を私達以外の人に
食べてもらうことって、そんなに無いからさ〜
いくらでも食べていいからね♡
あ、でも治ったばかりだから
ほどほどにね〜」
と、一人でまわし立てる穰子。
農家なのだろうか？少女2人で？



素朴な一軒家である。見た感じ部屋は六畳。穰子の後ろには土間があり、大きな瓶かめや竈かまどが見えた。他に部屋があるような感じではない。トイレも風呂も無く、電気も通っていない。しかし頭上にはLEDライトのような明るい光があった。よく分からないが田舎？田舎のような暮らしである。



自分が知らないだけで幻想郷には特有の技術があるのかもしれない。そう雑に自分の考えに見切りをつけ、穰子のお粥を食べさせた。そこでようやく、少女に全て食べさせてもらったことへの恥ずかしさがこみ上げてきた。穰子はそんな俺の気持ちを知ってか知らずか、ただ笑っていた。



穰子は食器や机を片付けると、
「もしかして、あなた外の人？」
と切り出した。
そうだ。自分は幻想郷に連れてこられ、
女の子達に自由に種付けしても良いと言われ、
人里に行こうとしていた所で足を滑らせ、
崖から落ちたのだった。
ようやくそれを思い出し伝えると、



「なるほど。もうそんな時期かあ。
あなたも大変ねえ。せつかく来たのに
崖から落っこちるなんて。
でももう大丈夫よ！河童さんの秘薬は
すぐに傷なんか塞いで元通りだから！
私のごはんも食べたし、体力だってモリモリ
全快のはずよ♥」
穰子は天使のような笑顔を浮かべ言った。



自分の身体を見ると、本当に傷が消えている。
まるで崖から落ちた事など無かったかのようだ。
穰子にあらん限りの気持ちをごめて礼を言う。
「いいよお。これも神の務めだし。
気にしないで。それより種付けはどうする？
良かったら私とするかな？」
と、急に話を振られて驚いた。そうだ。「どの
女の子とシてもいい」のだった。



それにしてもあまりにも素で言われたので、
あまりにも現実との常識の違いに惑っているよ、
「あ、ごめんね！まだ治ったばかりで
そんな気分じゃ無かったかな？
それとも…私みたいなぶよぶよしたのは
タイプじゃ無かったかな？」
見当違いの気の使い方をされてしまった。
思わずその豊満な胸を見てしまう。



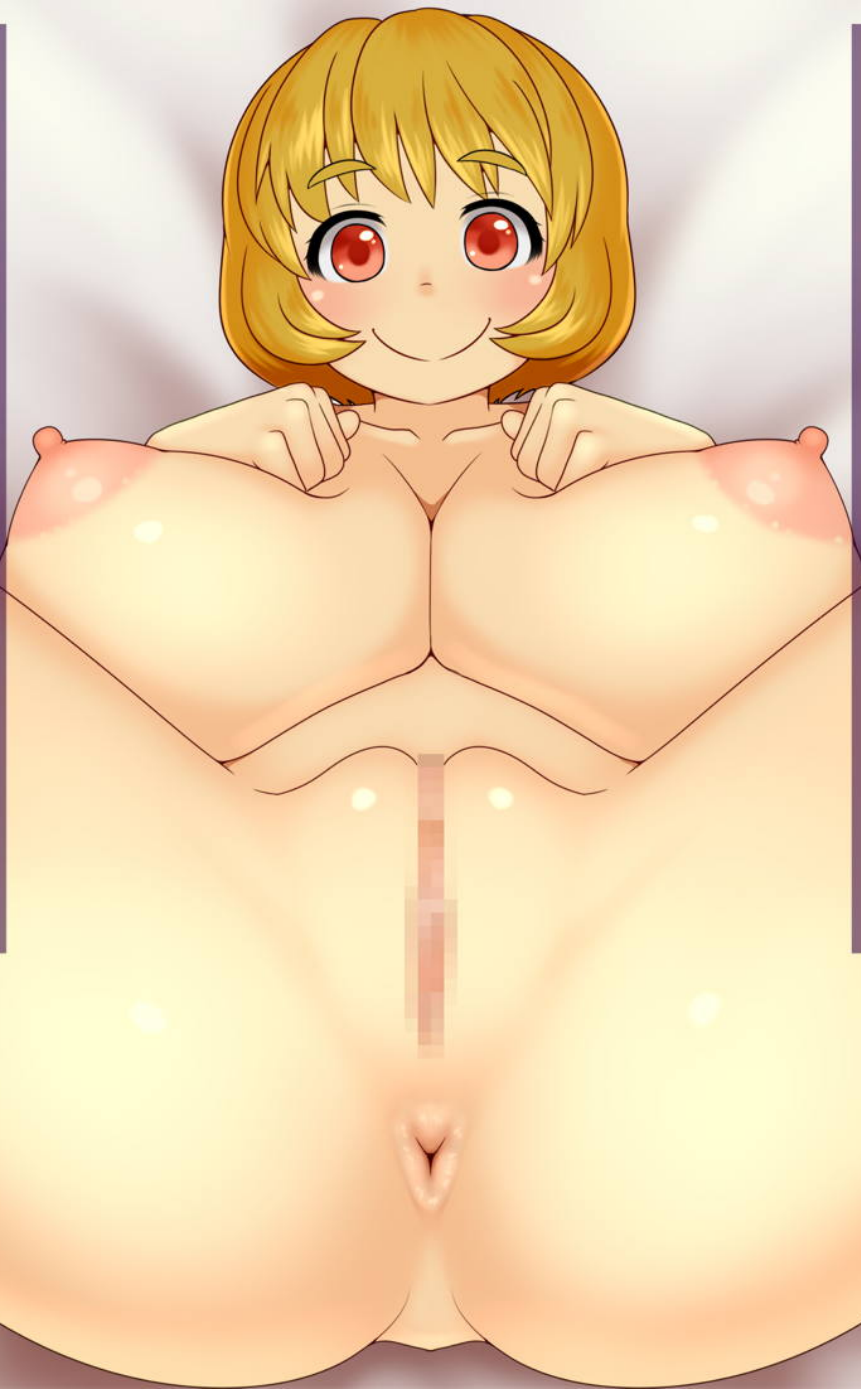


規格外に大きな胸である。
早苗さんや華扇さんも相当大きかったが、
それすら比にならないほどたわわに稔った
爆乳である。
そんな娘から積極的に誘われて、断る男は
貧乳好きだけだろう。
大慌てで首を振り、そんな事は無いと伝えると、
「本当？じゃあ今すぐ準備しちゃうね！」

穰子はすぐに布団を敷き、裸になり、その場に寝転び、足を広げた。眼の前に大きな胸と、それに負けないぐらい大きな尻が目に入る。

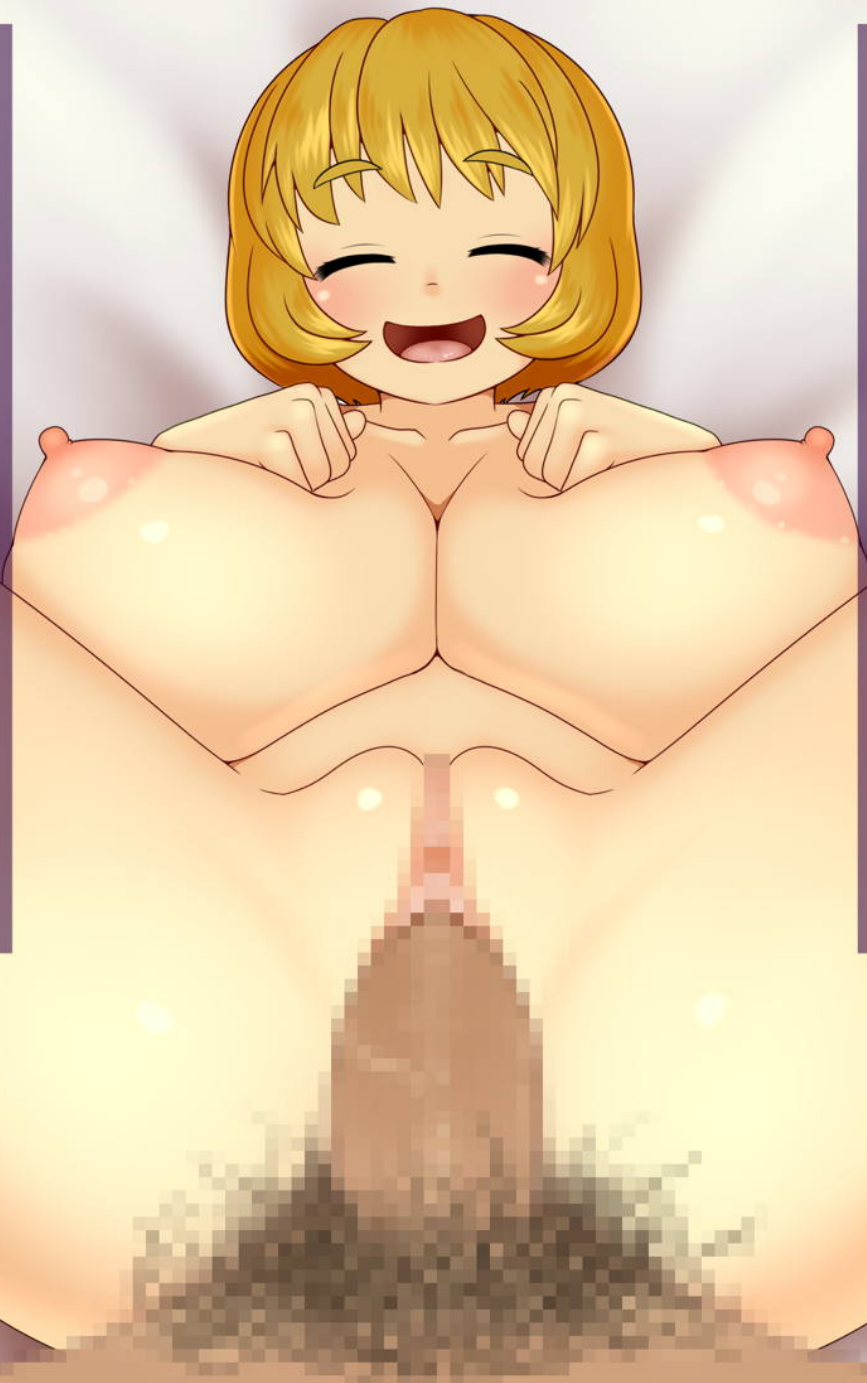
「さ♡どうぞ召し上がれ♡」

自分が出した食事とほとんど同じようなノリで、自らの身体を差し出す穰子。たまらずにいきり立った男根を出し、穰子の秘所へと挿入した。



「うんうん♥食べた後は運動だよね♥
私の中でいっぱい運動しようね♥」
穰子は犯されながら笑顔で告げる。

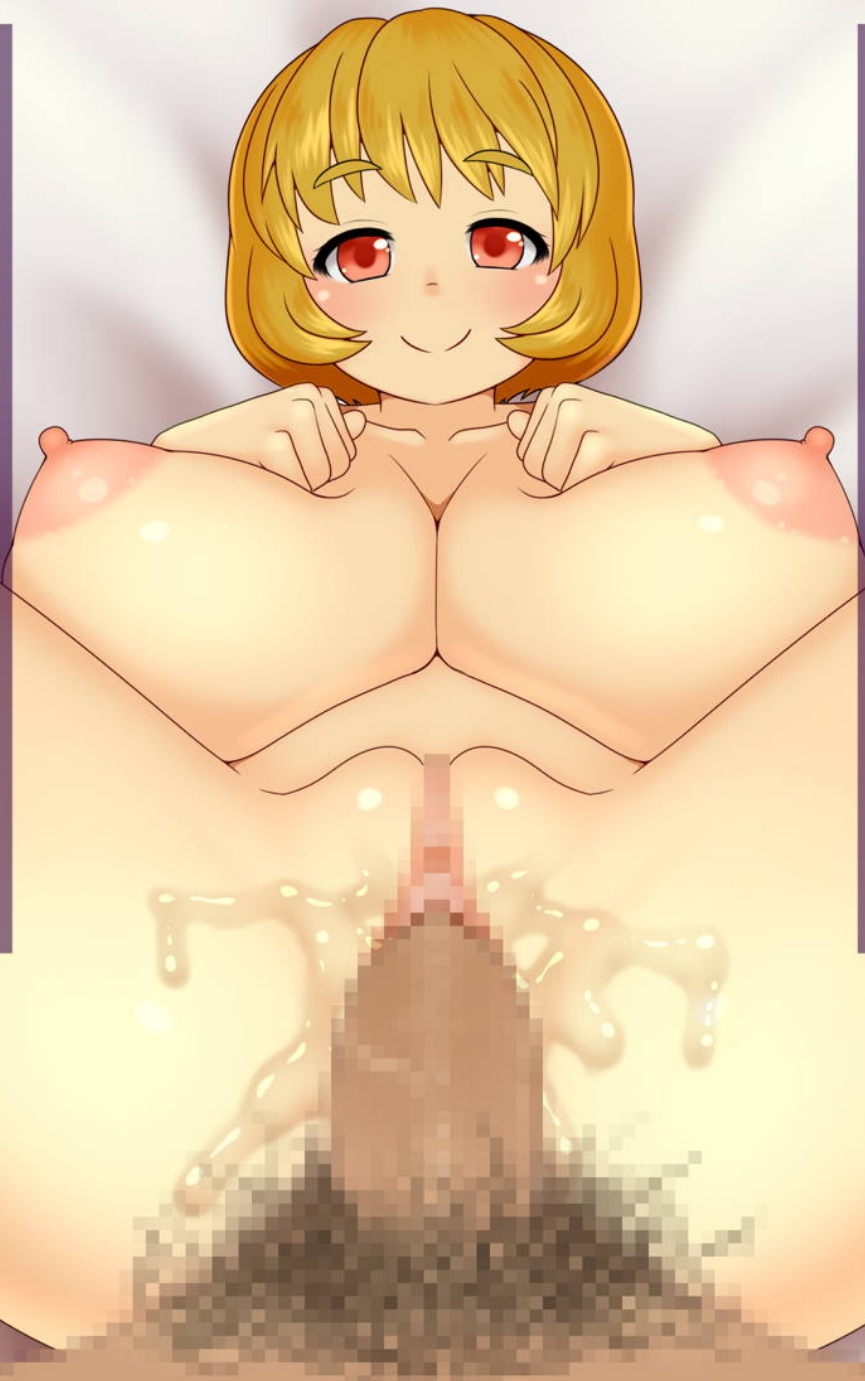
これで中出しされたら自分が孕むという事が
分かっているのだろうか？
そう思える程に穰子は純朴そうな瞳で
自らの結合部を見つめている。




「大丈夫だよ♡なあんにも気にしないで
いっぱい中出ししちゃってね♡
好きなだけ私で気持ち良くなっ
ちやおうね♡」

やがて精子が尿道を登ってくる感覚が
やってくる。もう少し穢子を味わいたくて
ピストンのペースを調整していると…


「めっ♡だよ♡
大丈夫。いっぱい出して♡」






足でガツチリと腰をホールドされ、
思わず穣子の奥まで挿入してしまう。
その衝撃に快感が頭のとっぺんの毛先まで
駆け抜けていき、同時に精液が男根から
溢れ出す感覚を味わった。

「いっっぱい♡いっっぱい出そうね♡」
精液が、穣子の膣内を汚していく。
おそらく子宮にも入り込んでいるだろう。
穣子は射精が続く間、ずっと腰をホールドし、
精液を取り込んでいた。



「いっぱい出したね♡えらいえらい♡」
穰子は精液を全て子宮で飲み込むと、
俺を抱き寄せて頭を胸で抱え込み、
頭を撫でた。

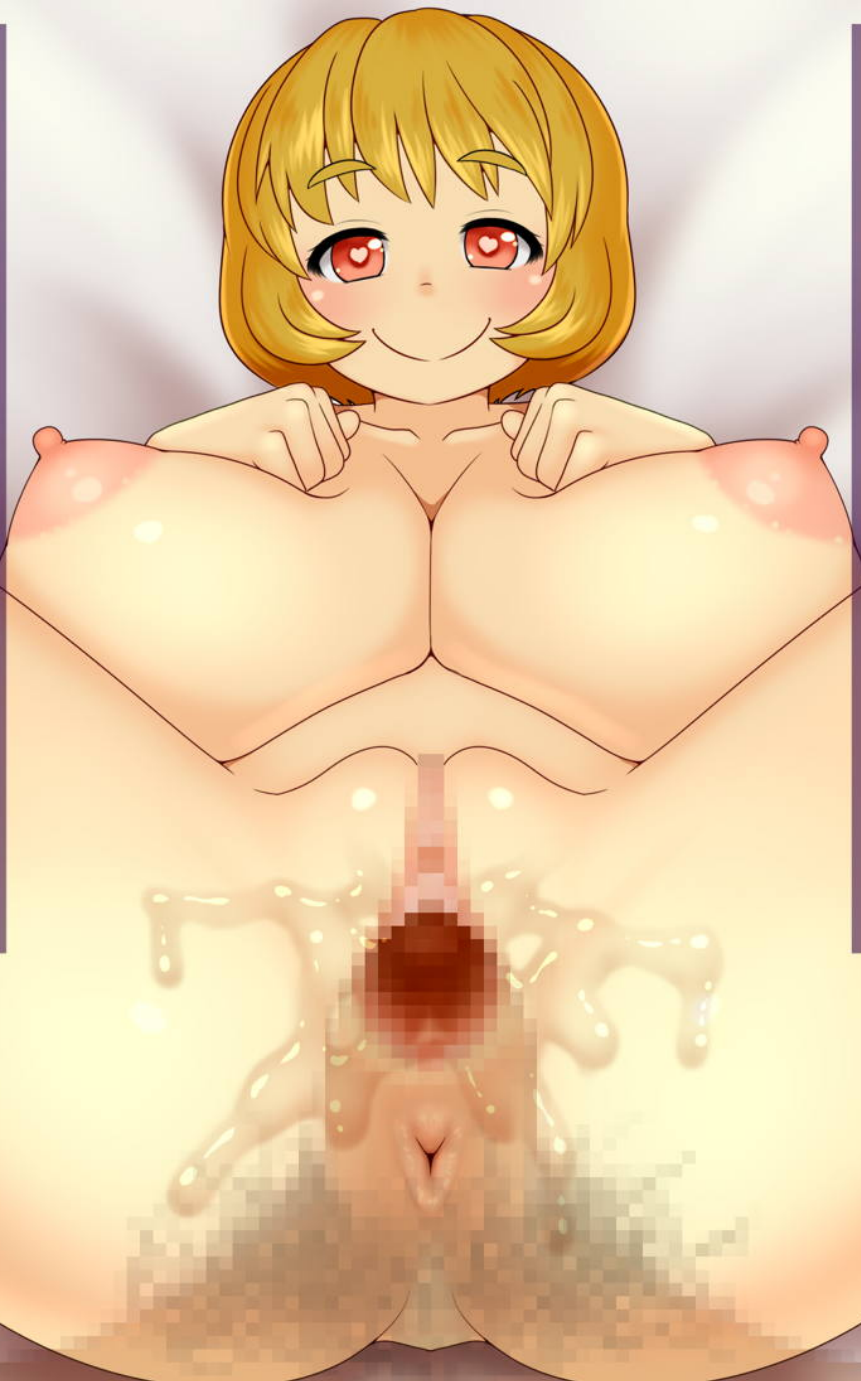
安心感と幸福感に包まれ、
心が落ち着いて来たので
男根を引き抜こうとした所で
自らの身体の異変に気がついた。



男根が全く萎えていない。
それどころか出したばかりだというのに
ギンギンにいきり立っている。
これは…と思い穢子を見上げると、

「ね？大丈夫でしょう？♥
私の神力の入ったごはんを食べたから、
精もいっぱいいついてるんだよ♥
これでもっとたくさんえっち出来るよ♥

俺はピストンを再開した。
始めから穰子は自分がこうして犯され、
孕まされる事を計画していたのだ。
純朴な顔をしてなかなかにしたたかである。



「うんうん♥もーっと私の身体を
堪能してね♥無責任な射精もいっぱいして、
パパになっちゃおうね〜♥」
穰子はこの状況を
心から楽しんでいるようだった。

とろけて来た顔の穢子を見ながら、
二度目の射精。
一度目よりも多く出たのでは無いだろうか？
と思うほどの長い射精だった。

出しすぎた精液が穢子の膣で受け止めきれず
結合部から漏れ出した。

穢子は満足そうに笑みを浮かべ、

「よしよし♡これなら受精確実だね♡」
と言いながら、下腹部を撫でた。



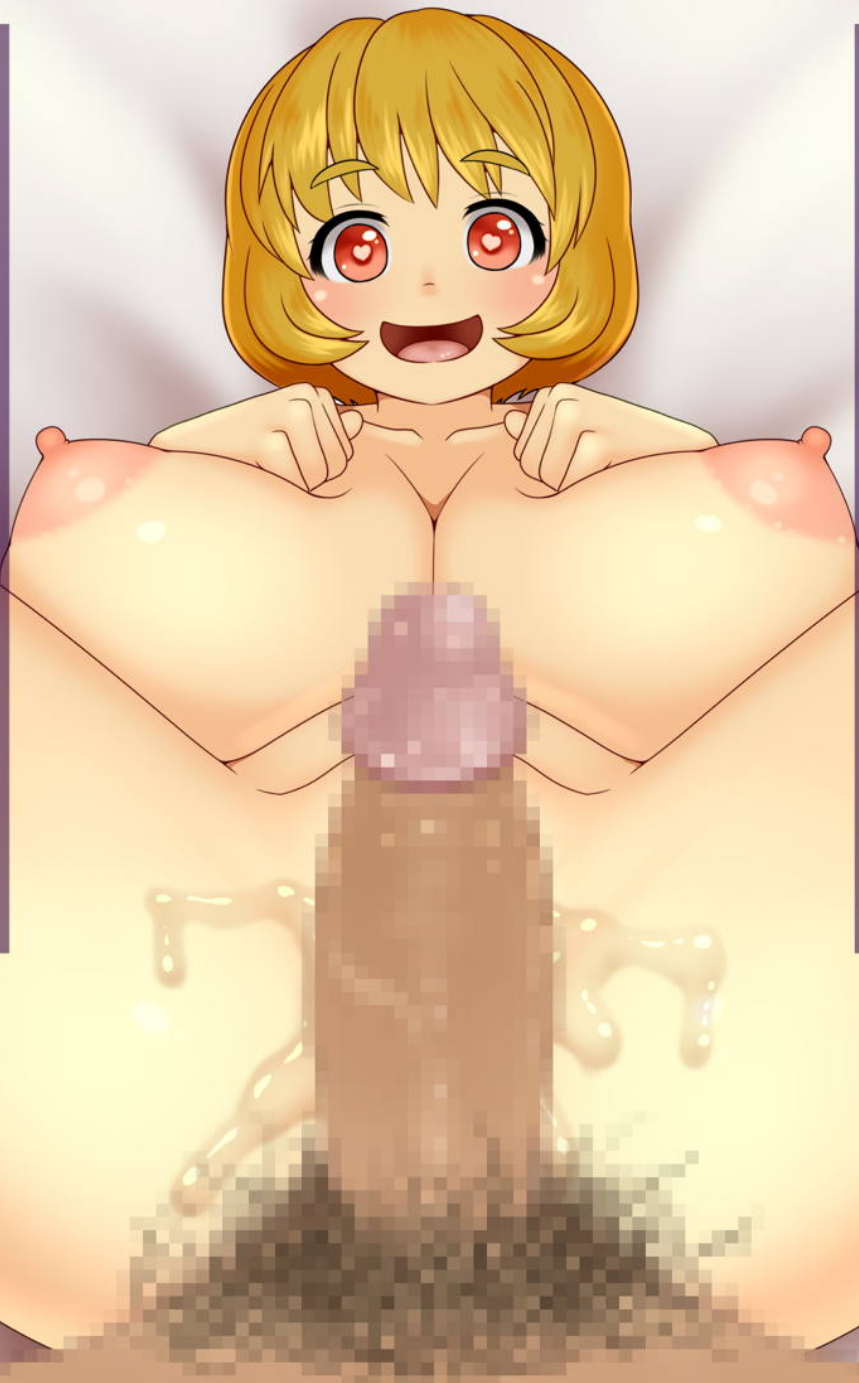
しかし、まだ男根は萎えては居なかった。

「大丈夫♡ 言ったでしょう？」

『好きなだけ』って♡

キミの気が済むまで、いくらでも

付き合っただけからね♡」



穰子のその言葉に、理性のタガが外れ、

獣のように穰子の身体を貪った。

穰子はその全てを笑顔で受け入れていた。

気がつくくと、穢子は気を失っていた。
いったいどれだけ出したのだろうか…
シーツはすっかり二人の愛液で
ドロドロになっており、吸いきれなかった
精液が溜まっていた。



流石に男根の猛りも収まり、
性交のしすぎで疲労感に襲われ、
ようやく穢子から男根を引き抜き、
仰向けに倒れ込んだ。

ぼんやりと目を開けると穰子のお姉さんが居た。確か静葉…とか言っていたような…。
起きたばかりでボーっとする俺に

「あら、おはようございます。起こしてしまいましたね。すみません」
と話しかけてくる。そしてやけに股間がムズムズと……





はっと目を開けると、静葉は俺に全裸で跨がっていた。
男根は静葉に挿入されていて、既に淫靡な音を響かせていた。
静葉は

「どうもおちんちんが勃っていたようでしたので、いただいてしまいました♡」

と優しく笑った。誰とも種付けして良いと言われたが、まさか女の子の方からこうしてくるとは、俺は驚きつつも、心地よくやってくる。静葉は一生懸命に腰を揺らし、精液を搾り取ろうとしてくる。





「どうですか？痛かったりしませんか？」
昨日穰子に言われた事と同じことを聞いてくる。姉妹なのだなあ
この場で関係ない事を考えてしまう。
頷くと静葉は

「んしょっ♥よいしょっ♥」と可愛い掛け声で搾精を再開した。



射精しそうになると、静葉は思い切り腰を落とし、男根を奥深くまで飲み込んだ。快感が股間から頭へと駆け抜けて行き、ドバドバと射精する感覚がやってくる。「た〜くさん出してくださいね♥」
静葉は妖艶な笑みを浮かべていた。

射精し終わると静葉は元通りの綺麗な笑顔に戻り、
「さ、起きてください♥

そろそろ妹がごはんを作り終える頃ですから。」
と、繋がったまま、俺の身体を起こすのだった。



穰子のごはんを堪能してから、二人を連れて外に出た。真っ白な日差しが降り注ぎ、気温は高い。木陰を見つけて座ると、今日はここでしようとして二人に提案した。



「何かと思ったらそういうこと」
「はいはい♥それじゃあ準備しましょっね♥」
ふたりはその場で遠慮せず服を脱ぎ始めた。



二人は裸で寝転がり、
「今日もたくさん中出ししてね♥」
「どちらからしてもいたっても構いませんからね♥」
と、身体を晒した。
自分の為の子が二人も股を広げて犯されるのを待っているというとても贅沢な光景だ。



ありがたさに感謝しながら、
まず穰子の方へと覆いかぶさる。
先日のように穰子の膣へと
挿入すると、まだ濡らしても
いないはずなのに男根は
するすると穰子に飲まれていった。
「すっかりキミのちんちんに
慣れちゃったみたい♡」
嬉しそうに穰子が言う。



「良かったわね穂子♥」
静葉も嬉しそうに言う。
静葉の方は、今朝シたからか、
まだ股がしっとり
濡れているように見える。
それとも妹の痴態を見て
感じているのだろうか？



遠慮無く種子の子宮内に射精して、
静葉の方へと移る。
静葉の膣も、この時を待ちわびて
いたかのように、男根を受け入れ
飲み込んでいく。
女の子を軽い気持ちで犯していく
征服感と幸福感に飲まれて、
思い切り腰を動かした。



静葉の子宮内にも射精し、
男根を引き抜くと、膈内から
精液がトロトロと溢れ出てきた。
どうやら今朝シた時の状態
そのままだったらしい。
この娘たちは本気で子供を
作ろうと受精を待っているのだ。



絶対にこの娘たちを孕ませてやる。
そう思い夢中で二人を犯し、
射精し続けた。



おっぱい



「あなた、見ない顔ね。どうしたの？こんなところで？」
人里の川べりに座っていたら声をかけられた。

「道にでも迷ったの？」

自分は外の人間で、ここには女の子に種付けしに来たのだと伝えた。
しかし自分はコミュ障でなかなか声もかけられず悩んでいたのだと。
「あ、あぁ〜。なるほどねぇ〜。そっか〜そんな時期か〜。」



女の子は赤くなり目をそらした。自分もそれを見てバツの悪い感じになっちゃった。実際凄いことを言っているのだ。嫌がる娘も居るだろう。そんな娘に手を出すのもよろしくない。そう思ったのでさっさとこの場を立ち去ろうと腰を浮かしかけた時「じ、じゃあ、私しようか？その、たっ種付け……」

と、赤髪の娘が真っ赤になりながら提案してきた。無理にさせるのもよくない。嫌なら無理にしなくてもいいよと伝えると、



「いっ！いや、別に嫌とかでは無くて！むしろ頂きたいところだけど！別にこのイベントに参加したかったとかそういうのでも無くて！こ、困って…そう困ってるみたいだからやってあげるだけで！」

と、しどろもどろになってまくしたてて来た。

「よっ、よし、言質取ったわよ！今から嫌って言っても遅いからね！」

と脅しなのかなんなのがよく分からない感じが迫ってきた。



「ほ、ほら！こういうの、男は好きなんでしょ？ど、どうよ？」
赤毛の娘は自らスカートをたくし上げると、そう尋ねて来た。
水玉のぱんつが目に入り、思わず凝視してしまう。
「えーっと、脱がしてもいいのよ？」
なんだか微妙に挙動不審な感じが気になるが、言われるままに
ぱんつを脱がせる。名前も知らない女の子とこれからセックスするのだ
という興奮が湧いてきた。

脱がせると目の前にはスジがある。

「あゝゝ♥見せちゃってる…知らない人に私のおまんこ…♥」
自分の恥ずかしい場所を、こんな往來の場所で見せつけ、
興奮しているようだった。

割れ目に触れると、既にしっとりとしていて、指で少し開くと
くちゅりと濡れた音がした。

どうやら露出で興奮する性質のようだった。



「っ♥うあっ♥ちよつと…触ってばかりいなくてあんたも出しなさいよ」
赤毛の娘はそう言うのと、相手のズボンのチャックを下げ、いきり立った
一物を取り出した。

「んん♥良いわね？私がヤっちゃっても♥もう嫌って言うっても
やめてなんてあげないけど♥」
そう言っつて自ら男の一物を自分の膣内へと挿入した。



ぐじゅりと音を立てながら、しかし驚くほどすんなりと、彼女の膣は男の一物を飲み込んだ。早々に奥の奥まで挿れきってとても満足そうな表情をしている。

「はぁ〜〜〜みんなも見てる所で男とセックス…♥」

彼女はすでに自分が作り上げたシチュエーションに飲まれているようだった。

すぐに上下に動き始める。





「あつ♥良いちんぽだ♥気持ちいい所に当たる♥」
「どうやら一物もしつかり気に入ってもらえたようだ。
夢中になって腰を降り出した。
こちらは座っているだけだというのに、勝手に気持ちよくなってくれる
のだから、これほど楽なものもない。おまけに中出しもし放題なのだ。
彼女の快楽に溺れる様を下からじっくり眺め、
キリの良さそうなところで腰を掴み、思い切り下に引き下げた。」



「おっ?ぐううう」♥♥♥
娘が達すると締め付けが急に強まり、彼女の膣に流されるまま射精した。
「おっ♥……おおっ♥……急に……♥ひっ♥挿れるなんてえ♥」
すっかり夢中になっていた娘は驚いたようだったが、
下からもう一突きしてみると、
「おひゅっ♥♥まっ♥待つて今イってりゅ♥」
とても嬉しそうだったので、更に突いた。



「あひやいつ♥おっ♥まっ♥こんにや所で♥
イグツ♥イぎ顔♥晒しちやってるゆお♥♥♥」
という言葉最後に、とても良い顔をしながら気を失ってしまった。
しまった。やりすぎてしまった。
やめると言った時点で止めておくべきだったのかもしれない。
仕方なく、彼女を横に寝かせて起きるのを待つことにした。

「あつあなたが悪いんだからね！」
彼女は起きてからプリプリと怒ってきたが、本当にこちらが悪いので
素直に謝る。

「ちゃんと中出ししてくれたみたいだから良いけど。

この責任はちゃんと取ってもらおうからね！

今日の夜、またココに来るように！」

と言うだけ言って去ってしまった。





夜の人里――。

街灯もなく、月明かりも暗めなせいで雰囲気は昼間と全然違っていた。外の世界ではもはや考えられない光景。

町並みも古いせいで、タイムスリップでもしたかのような感覚が、一層強くなる。そんな中ようやく昼間に居た場所までやってきた。

「ようやく来たわね。」

後ろから声がかかる。昼間と同じ声。間違いなく赤髪の娘だ。

「さあ、責任とってもらおうわよ。」
声の方に振り向くと、すごい光景が待っていた。
裸の女の子である。昼間の娘が、裸で立っていた。
身体には大きく♡♡と描かれており、膣の方に↓が伸びている。
露出癖があるとは思っていたが、まさか露出狂の方だったとは…。
しかし暗がりにもその肌はよく目立ち、娘の身体を明確に浮き立たせる。
すっかり魅入っていると、





「あんたには私の趣味に付き合ってもらわうわよ。
……あんなに気持ちよかったの……初めてだったの……。
こんな人里のど真ん中で、誰かが見てる中で、
男と種付けセックスするのが……！」
そう言って覆いかぶさってくる。
「責任とって、私をあんたのザーメンタンクにしなさい♡」

赤毛の娘は遠慮なくジツパーを下げ、一物を取り出すと前戯も無しに自分の秘所へと突っ込んだ。

「ああ♡好き♡やっぱりあんたのおちんちん好き♡

ね♡またいっぱい種付けしてね♡お腹いっぱいにしてね♡」

熱烈なコールを続けながら、赤毛の娘は大きく腰を降る。

昼間のアレによほどハマってしまっただらしい。





娘の腰を掴み、まるでオナホのように思い切り腰を落とさせる。

「つつひい〜♡これっ♡これ好き♡」

もっ♡もっ♡として♡」

要求されるがまま、彼女の腰を何度も落とし、同時に突き上げる。

乱暴にすればするほど、彼女は悦んだ。

「おっ♡おほっ♡おおっ♡おうっ♡」

彼女の口からおおよそ女の子が出すものでない喘ぎ声が発せられる。

勢いに任せて射精すると、彼女は大きく痙攣しながら達した。

「~~~~~♡♡♡♡」

射精が収まっても、彼女の膣は貪欲に男根を刺激し、精液を根こそぎ奪い取ろうとしているようだった。

「もつと♡ちようだい♡」

彼女もそのつもりのように、すぐにピストンを再開した。



「うっ♥♥♥」

最後の射精が終わると、彼女ももう限界だったようで、繋がったまま腰を落として動かなくなった。

「……はーはーはーはー♥……はーはーはーはー♥」

本当にクタクタになってしまい、お互い言葉も交わさず、暫くそのままだらっとしていた。



「……私、赤蛮奇っていうんだけど……」

赤毛の少女が思い出したように自分の名前を名乗った。

「また、シてもいいかな？」

と聞いてくるので、快い返事を返した。

どうやら自分もこの娘との交尾にハマってしまったらしい。

「えへへ♥」

満足そうに笑った赤毛の娘の膣から、ごぶりと精液が溢れ出た。











おまけ





おまけ





おまけ









「本日は無理言って来ていただいております。
このタイミングでどうしても私も子作りしないといけなかったのです。
どうかこの阿求に子種をたくさんいただけると嬉しいのですが……」
突然連れ込まれた大きなお屋敷の中で、阿求と名乗った少女は
大きく自分の秘所を見せつける形で寝転がっていた。



「なにぶん身体が弱いものですから、あまりお屋敷から外に出られないのです。このような私ではあまり殿方にご満足いただけるか分かりませんが……」

遠慮がちに言うが、彼女の身体はかなり豊満だ。胸は大きく、尻の肉付きも申し分無い。肌も健康的な色で、彼女の顔が童顔であるアンバランスさが、逆にこの光景を卑猥なものにしていた。





「あ♥おまんこ見られるのですか？どうぞ♥広げて見てください♥」
思わず吸い付けられるように阿求の秘所を広げた。
彼女の綺麗な膣内は淫靡に男を受け入れる準備をしており、
かなり子宮が降りてきて居るのが分かる。受精する準備も万端のようだ。
「どうでしょうか？霊夢さんや仙人さまには劣るかもしれませんが…」

阿求は自信無さげに苦笑しているが、そんな事はもうどうでも良かった。
バキバキに怒張したモノをズボンから放り出すと、

早速阿求の上に覆いかぶさった。

「まあ♥子種をいただけるのですね♥ありがとうございます
至らぬ身体ではありますが、存分にお使いくださいますませ♥」



身体が弱いと言っていたので、ゆっくりと男根を挿入する。
先っちょだけしか入れていないにも関わらず、阿求の膣はペニスを
歓迎するように吸い付き、我慢できないときでも言わんばかりに
うねって挿入を促す。



半ばまで入れると、先程広げた時に見えていた子宮口にたどり着いたようだった。阿求は男根が奥までたどり着いた事が分かり、「す、すみません…。半分しか入りませんでしたね…。」と詫てきた。いちいち気にする娘だ。身体が弱いせいだろうか？ともかくお互い遠慮したままでは楽しくない。ピストン運動を開始した。なんとか打破出来ないかと思ひ、ピストン運動を開始した。



阿求の膣内は思った以上に狭く、引き抜く動作の度に、まるで「行かないでくれ」とでも言いたげにペニスに吸い付いてくる。そのせいか、突き入れる時にかなり強めに挿入してしまおう。その度に阿求の、年の割に小柄な身体が大きく揺さぶられ、大きな吐息が漏れた。



「ふっ♥だんだんっ♥奥まで♥入るように♥なってきましたね♥」
嬉しそうに阿求が言う。膣内が性交によりほぐれてきたのだ。
気になっていた事が一つ解消されたようで、性交中だというのに
安心した表情をしている。

「出したい時は♥いつでも出して♥構いませんからね♥
でも♥必ず一番奥で♥お願いしますね♥」





女の子から安心した表情で中出しを要求されては、
もう何も遠慮するようなことは無かった。
男根を奥の奥まで挿入し、思い切り精を吐き出す。
「ーーーーっ♡」
阿求は突然やってきた膣内射精の快感に、軽く達したようだった。

射精しきってから男根を引き抜くと、彼女の小さな膣内からはすぐに精液が漏れ出した。

「あ……♡」

阿求はその光景を見て少しの間うっとり余韻に浸っていたが、やがて男根がまだ元気そうであるのを見ると、



「す、すみません。ご迷惑でなければ……その……」
と遠慮がちに言ってきた。なにを言いたいのか判断出来ずに居ると、
「……もつと、お願いします♥」
再び性交の提案をしてきた。
阿求の気の済むまでしてやろう。そう思い再び挿入を開始した。





数時間後

「もっとお願ひします♥もつとザーメンください♥」
阿求の性欲は底なしだった。あれからずっと性交を続けているが、
中に出す度にもつともつとせがんできた。
不思議なもので、自分も何度も射精しているのに萎える事がない。
身体の相性が良いのか、阿求のしわざなのか、分かりはしない。



ただ言われるまま性交し、射精し続けた。

「あ♥また出てますね♥もう覚えましたがよ♥あなたの弱いところ♥阿求の膣内は始めの頃のしおらしさ(?)が嘘か猫かぶりであったかのように、男の精を搾り取るだけの魔性の蜜壺になってしまった。」

「もつとくださいね♥あなたの精子で絶対孕んでみせますから♥」



もしかしたら身体が弱いと言うのも嘘だったのでは？
そう思うぐらい豹変した彼女は、子宮が精液でいっぱいになっても
もろともせず、気持ち良いほどの笑顔で性交を続けた。
子宮内の卵子が、数多の精子を受け入れ受精する音が
聞こえた気がした。





おしまい



華扇 「はい。外の世界からはるばるよく来てくれました。

このツアー代表の茨木華扇よ。」

早苗 「早苗です。皆さんには、これから幻想郷の女の子達を

孕ませるために、たくさんセックスしてもらいます♡」

霊夢 「これも幻想郷のためだから、遠慮なんかしないで

好きな子と種付けを楽しんでいってね。」

華扇 「でも、まずは私達の相手をよろしくお願いしますね♡」



「それじゃ、私とシたい人は並んでね♡
好きただけ膣内射精しちゃっていいから、みんなの精液で
お腹いっぱいにしてちょうだい♡」
霊夢がそういうや否や、すぐに行列が出来た。
皆獣のように飢えた目で、陰莖をギンギンに勃起している。
霊夢は自慢の賽銭箱にもたれ掛かり、お尻を突き出し
スカートを持ち上げる。皆の一物をすぐにでも啜えるため、
当然のように履いていなかった。男たちにキレイなスジが
丸見えになる。



男の一人が我先にと飛び込み、早速霊夢に挿入した。

「いっっぱい気持ちよくしてあげるからね♡」

霊夢はにつこりと笑い男の一物を膣の奥まで受け入れると、男が動きやすいよう体勢を整え、身を任せた。

男はすぐにピストン運動を始め、霊夢の小さめの身体がガクガクと揺れた。

「あ♡あ♡♡♡♡♡」

すぐに霊夢の体の奥から勢いに任せ息が飛び出る。

結合部からは愛液が混ざり合う下品な音が響いた。

間もなく男が達し、小さく痙攣しながら霊夢の子宮にどぶどぶと精を解き放った。

「ふっ♡んん……♡」

霊夢も射精の勢いに軽い絶頂を覚え、身をよじる。

男はそれでも足りないかと、もう一度霊夢の奥まで肉棒を入れ直し、尿道に残っている全ての精液を出し切った。

「ん……ふう……♡……気持ちよかった？」





男が満足して男根を引き抜くと、霊夢の割れ目は閉じきらず、そこから男が大量に出した精液がトロトロと漏れ出した。

「いけない。次の人早く来てちょうだい。」

せっかく出してもらったザーメンが出てっちやうわ。」

その言葉に、次の男が駆け寄り、霊夢のドロドロの膣に陰茎を突き立てた。



「それじゃ、あなた達はまずはしっかりと女の人の身体を勉強しようね♡」

華扇はツアーの代表として、童貞達の筆下ろしを担当していた。

大きく足を広げ、自分の女陰を惜しげもなく晒す。

女を知らない男たちは、目の前の女がそんな姿をとっているのを見ただけで、興奮し、中には怒張した自分の一物をしごき始める者も居た。



「ここがクリトリス。ここが尿道。そしてここが、
今からあなた達が使う場所。膣になります♡
さあ、あなたの手で広げてみてください♡」
華扇は一人に指示を出し、自らの秘所を広げさせた。
雌の匂いが辺りに充満し、男たちの興奮を更に掻き立てる。
「そして奥に見えているのが、おまんこの一番奥。
子宮口になります。この中にたくさん
ザーメンを注ぎ込むんですよ♡」



「では、そろそろあなたのおちんぽ♡いただきましょうか♡」
華扇が自分の秘所を広げている者へ誘いの言葉をかけると、
男はすぐに華扇の穴に挿入を始めた。
男のものは既にゲギンギンに怒張しており、降りてきていた
子宮を奥の奥まで押し上げる。
「んんっ♡よく出来ました♡童貞捨てられましたね♡
えらいえらい♡」
華扇は子供をあやすように優しく微笑む。



しかしその声色には淫靡なものが混じっていた。
男を受け入れ種付けを待つ雌の声。

ソレに誘われ男はすぐにピストン運動を始めた。

「ん♡ん♡ん♡上手よ♡いい子いい子♡」

近くで囁かれ、男の興奮は際限なく増していく。

先走り汁が膣を覆い、すぐに結合部からぐじゅぐじゅと

汚い水音が漏れ出した。

「さあ、ぴゅっぴゅっぴゅっぴゅっぴゅっぴゅっ♡」



その言葉に我慢できず男は思い切り精を吐き散らした。
痙攣する男のモノから濁濁と精液が注ぎ込まれる。
(やっぱり童貞は良いわね♡キラキラしてて、
種付けに遠慮がなくて♡孕ませるのに必死で♡)
華扇は満足そうに全てのザーメンを受け入れると、
「はい♡脱童貞で初種付け♡よく出来ましたよ♡
私の子宮、あなたのザーメンで暖かいです♡」
そう本心からの言葉を伝えた。



男がチンポを引き抜くと、どれだけ精を吐き出したのか
ゴポリと音を立てて膣内から精液がこぼれ落ちた。
「さあ♡お次の童貞さん、私の膣内へどうぞ♡
みんなちやあんと筆下ろししてあげますから、
安心して私を使ってくださいね♡」
本当に中出ししても良い事を知った童貞たちは、
我先にと華扇のそばに飛び寄っていった。



「は〜い♡ここは早苗ちゃんのザーメン飛ばしの
コーナーですよ！
あなたの精子をぴゅぴゅっと飛ばして、私のオナホ穴に
入れちゃいましょう☆
遊び感覚で女の子を孕ませられますよ〜♡」
早苗は凄い事をやっていた。おおよそ常識的には考えづらい
方法で孕もうとしていた。男たちは困惑しながらも、
早苗の肢体に負け、自分の一物を取り出していた。

「そうそう！直接入れちゃダメですよ♪
皆さんそこでシコシコやって、私の穴にホールインワン
してくださいね♡
一番上手に入れた人は後で私からサービスが
ありますから、頑張つて入れてくださいね☆」
なんとなくサービスという言葉に釣られて、
男たちのしごいている手が速さを増す。
間もなく大量に飛んでくるザーメンの事を想像し、早苗は
期待に満ちた表情をしている。



そして男たちの劣情の塊が早苗に降り注いだ。
白く粘ついた精液がこれでもかと早苗の身体を汚していく。



「あはっ♡すごい臭い♡♡」
性の捌け口とされた早苗が嬉しそうな声を上げる。
早苗の身体は最早精液で全身デコレートされており、
綺麗だった裸体は、下品な肉便器に成り果てていた。
幾分かの精液はちゃんと早苗の膣に命中しており、
テープで子宮口までくぱっと開かれた膣内を満たしている。
「いっぱい入りましたね♡♡
ちよっと待ってくださいね♡今飲んじやいますから♡」



早苗はそう言うと、器用に精液を子宮口から「飲み込んで」いく。

ごぼりごぼりと音を立て、精液が早苗の子宮に収まっていく。自分たちの精液がそうやって女の体内に入っていく光景に、男たちは抜いたばかりだと言うのにゴクリと生唾を飲み込んだ。

「さ♡第二陣、行っちゃいましょう！」

どなたの精子で孕むか、楽しみですね♡」
男たちは再び自分のモノをしごき始めた。





霊夢の膣はすっかり性液まみれとなっていた。
何人もの男に犯され、子宮内は既にパンパン。
それでも霊夢は男とまぐわい続けていた。
「はい♡いっぱい出せましたね♡次の人どうぞ♡」
本日二十四本目の男根が霊夢の膣内に挿入される。
もはや作業のように行われる挿入・ピストン・種付け。
霊夢は今完全に性処理を行うためだけの
肉便器だった。



「もう他の人のでいっぱいになっちゃってますけど、遠慮なく中出ししちゃってくださいね♡」
男は全然遠慮していない。ただ目の前のメスに種付けするためだけに腰を打ち付けていた。そのたびに子宮から溢れ、膣内を埋め尽くしている見知らぬ男の精液が、汚い音を立てて膣から飛び出してくる。
やがて男もラストスパートをかけ、そのまま無責任に射精し、子宮の奥へと流し込んだ。

「っ♡……ふう♡お疲れ様でした♡
たくさん入れていた দিয়ে ありがとうございました♡
これからは自由時間ですので、里に降りて好きな
女の子とセックスしてもらって大丈夫ですよ♡」
一見とんでもないことを口走っているが、この幻想郷での
ルールはそうなっている。外の血を定期的に入れなければ
ならないという紫の指示である。なので外の人間を
攫ってきては、こうして乱交パーティーを
開いていたのだった。





霊夢は幻想郷の要なので早急に次世代の子を産まねばならず、故に幻想郷に連れてきた男全員とまぐわう事と決まってきたのだった。

大量の精液を膣から漏らしながら、

「流石にこれで孕んだかしら？」

とつぶやくが、幻想郷にそれを知るための機器は無い。

「河童とかに頼んだらそういうの作ってくれそうだけどね」と、一瞬そう考えるが、

「まあいいか。一月ぐらい続ければできるでしょ。」
考えを適当に打ち切り、お茶を飲みに行った。

ようこそ♡
プリズムリバーの
握手会へ♡

お礼に、今日は
私達がいろいろ
サービスして
あげちゃうからね♡

いつも私達を
応援してくれて
ありがとう



さあ、
みんな並んで〜！
一人ずつ来てね♡

私達の身体の
どこと握手しても
いいからね♡

存分に愉しんで
イってよね♡



は〜いこんにちは♡

貴方はどんな

「握手」を

ご希望かしら？

いらっしやい♡

もうギンギン
じゃない。

握手する場所は

私の膺で

いいかしらっ♡

胸でもおまんこでも

遠慮はいらないから

どんどん

来ちゃってっ♡



はい「握手」♡

いつも応援してくれて

ありがとう♡

私の膣内なかでいっっぱい

気持ちよくなってる♡

君は童貞だったの？

良かったね♡

私で卒業だよ♡

ついでに初中出しも

やっちゃん♡

そう、私に

種付け

したかったの♡

いいわよ♡

存分に出して

イってね♡



はくい中出し♡

沢山出したわね♡

どうもありがとう♡

これからも

応援してね♡

おっ、出たわね♡

初中出しおめでと♡

これで立派な

男の子だね♡

ん♡しっかり
精子が子宮に
入ってるわ♡

種付けしてくれて
ありがとう♡
またしようね♡



さあ次の人どうぞ♡
ここに居るみんな
ハッピーにして
あげるからね♡♡

私達全員に
種付けしちゃっても
いいからね♡♡

終わった人も
また並び直して
いいからね♡



はい♡
おまんこ♡
出してね♡

貴方は私をオナホに
したいの？
いいよ♡
オナホまんこに
握手してね♡

貴方も中出し
希望なの？

構わないわ♡
好きに使って
ちょうだい♡



んっ♡子宮の中に
精子いっぱい♡
ハッピー
ハッピーね♡

沢山出したわね♡
無責任種付け握手
お疲れ様♡

オナホまんこは
どうだった？
また使いたかったら
後ろに並んでねっ♡



貴方も膣で

握手するの？

みんな好きね♡♡

はい♡♡♡♡♡♡♡♡

みんな種付け
希望なのね。

大丈夫。みんなの
精子は全部
受け止めて
あげるから♡

しっかり受精して

あげるから♡

みんなの精子で

子宮いっぱい♡♡♡♡♡





数時間後

みんな今日は
たーくさん種付け
してくれて
ありがとうね♡

誰の精子で
受精するか、
楽しみだね♡

お腹の中が
精子で
パンパンだわ♡



握手会は
毎週やるから、
またみんな種付けに
来てね♡

またおちんぽ
よろしくね♡
待ってるよ♡

私達3人は
もうファン達の
肉便器だからね♡





おしまい



「今日の早苗ちゃんは種付けプレス体験会ですよ♡
皆さん一度はやってみたいありませんか？
女の子を組み伏せて獣みたいに種付けして孕ませる…。
そんな種付けプレスが今日は私でやり放題♡
さあ、誰でもどうぞ♡」
足を下品に広げ、男を誘う早苗。身体にはまるで店の
広告紙のようなウリ文句の落書きまでしてあった。



「今ならだいしゅきホルドもついてますよ♡
どなた様のお精子もがっちり逃しません♡
みくんな私の子宮がごつくんしちやいますからね♡」
売女でもこのような事は言わないであろう台詞を、早苗は
スラスラと、満面の笑みで言っていく。
近くに居た男はそのあまりの気軽さと、目の前の光景のギャップに
興奮を感じて、吸い寄せられるように早苗に覆いかぶさった。

男が早苗の膣に男根を挿入すると、早苗は足を男の背中に回し、男根が膣から抜けないようロックした。

先程言っていただけいしゅきホールドとやらである。

背中を押され、男の男根は早苗の奥深くまで一気に突き刺さった。

「は〜い♥子宮口までご到着です♥どんどん突いてくださいね♥」

男は言われるまま、早苗の膣を堪能する。先日あれだけ男を

受け入れていたとは思えないほど、早苗の膣は男を締め付ける。





「もっと勢いつけて♥ガンガン突いてくださいよ〜
せつつかくの種付けプレスですから♥

「おまんこ壊れちゃうぐらいヤっちゃいましょう♥」

男は締め付けの気持ちよさにうめき声を上げながら、勢いよく
早苗の膣に腰を打ち付ける。ぱんっぱんっとお気味よい音が
鳴り響き、早苗はその衝撃で大きく身体を揺らせた。



「いいですよ♥お上手です♥そのまま一番奥まで突っ込んで
びゅびゅ〜って出しちゃいましょう……ね♥」
早苗は男の射精するタイミングを見計らって、足の押さえつけを
急に強めた。男根はそのまま早苗の子宮口の中まで入り込み、
子宮内で大量に射精する。ほとぼしる快樂で男の体がビクビクと
痙攣し、男は溜め込んでいた精液を残らず早苗に流し込んだ。

男が早苗から身体を離すと、

「種付けプレスとだいしゆきホールドはご満足いただけましたか？

またのご利用、お待ちしておりますね♥」

と、子宮口から溢れた精液を垂らしながら、早苗は男を見送った。

「ふふふ♥作戦は成功ですね〜♥これなら絶対霊夢さんにも

負けやしませんよ！信仰も子宝も、全部戴きです！

さあ！お次はどなたですか〜？」



種付けプレス
体験会

誰のゲームで
受精するかは
お楽しみ♥

今なら
だいきもホールドも
ついでに♥



早苗は外から来た人間なので別格、里の男とも交わっても良いのだが、敢えて外の人間との交合を望んだ。霊夢になんとなく対抗意識も持っていたのもあるが、今回連れてこられた男たちは、特別霊力などに優れた者たちだった。その種を利用する事で守矢が更に反映することを狙っていたのだ。そして何より、大勢の見知らぬ男達とセックスするのが好きであった。



昨日からを含めると、最早何度目になるか分からない膣内射精を
されながら、早苗は今さつき初めて見て自分を犯した男を眺めた。
美形であろうと醜かるうと、変わらず自分を孕ませるため、
誰もかれもが腰を振り射精していく。その様に有る種の征服感の
ようなものを感じ、早苗はうっとり目と目を細めた。
「ふふ♥たくさん出しましたね♥私の膣はどうでしたか?♥」



男はあまりの快感にぼんやりしながら、ふらふらと去っていった。
早苗の前には男たちが行列を作り、男根をいきり立たせながら
待ちに待っていた。この男たちも自分が全部食らい付くしてやろう。
そのような癡猛な気持ちになりながら、自然に出る笑顔を見せつけ、
「さあ♥お次のかた、どうぞ〜♥」
男の男根を啜えこんだ。



おしま

「あなた、大丈夫？」
そんな声で目を覚ました。
目を開けると、2人の女の子が
自分を心配そうに見つめている。
ぼんやりとした頭で状況を
整理する。

そつだ。崖から足を滑らせて……

「随分とケガをしているわね……」
とりあえずまずは手当てね。
穰子、うちまで運びましょう。」
「がつてん！」
2人の少女は頷きあうと、
男の自分の身体を軽々と持ち上げ
空を飛んだ。



「はい！あ〜ん♡」
穰子と呼ばれた少女が俺の口にお粥を運ぶ。
その顔はなぜかとても嬉しそうで、
なんだかこちらも気分が良くなってくる。
身体が栄養を求めているのか、
それとも穰子の味付けが良いのか、
お粥がとても美味しく感じ、夢中になって
がつついた。



「おいしい？いやあく嬉しいわ〜♡
自分で育てたお米を私達以外の人に
食べてもらうことって、そんなに無いからさ〜
いくらでも食べていいからね♡
あ、でも治ったばかりだから
ほどほどにね〜」
と、一人でまわし立てる穰子。
農家なのだろうか？少女2人で？



素朴な一軒家である。見た感じ部屋は六畳。穰子の後ろには土間があり、大きな瓶かめや竈かまどが見えた。他に部屋があるような感じではない。トイレも風呂も無く、電気も通っていない。しかし頭上にはLEDライトのような明るい光があった。よく分からないが田舎？田舎のような暮らしである。



自分が知らないだけで幻想郷には特有の技術があるのかもしれない。そう雑に自分の考えに見切りをつけ、穰子のお粥を食べさせた。そこでようやく、少女に全て食べさせてもらったことへの恥ずかしさがこみ上げてきた。穰子はそんな俺の気持ちを知ってか知らずか、ただ笑っていた。



穰子は食器や机を片付けると、
「もしかして、あなた外の人？」
と切り出した。
そうだ。自分は幻想郷に連れてこられ、
女の子達に自由に種付けしても良いと言われ、
人里に行こうとしていた所で足を滑らせ、
崖から落ちたのだった。
ようやくそれを思い出し伝えると、



「なるほど。もうそんな時期かあ。
あなたも大変ねえ。せつかく来たのに
崖から落っこちるなんて。
でももう大丈夫よ！河童さんの秘薬は
すぐに傷なんか塞いで元通りだから！
私のごはんも食べたし、体力だってモリモリ
全快のはずよ♥」
穰子は天使のような笑顔を浮かべ言った。



自分の身体を見ると、本当に傷が消えている。
まるで崖から落ちた事など無かったかのようだ。
穰子にあらん限りの気持ちをごめて礼を言う。
「いいよお。これも神の務めだし。
気にしないで。それより種付けはどうする？
良かったら私とするかな？」
と、急に話を振られて驚いた。そうだ。「どの
女の子とシてもいい」のだった。



それにしてもあまりにも素で言われたので、
あまりにも現実との常識の違いに惑っているよ、
「あ、ごめんね！まだ治ったばかりで
そんな気分じゃ無かったかな？
それとも…私みたいなぶよぶよしたのは
タイプじゃ無かったかな？」
見当違いの気の使い方をされてしまった。
思わずその豊満な胸を見てしまう。



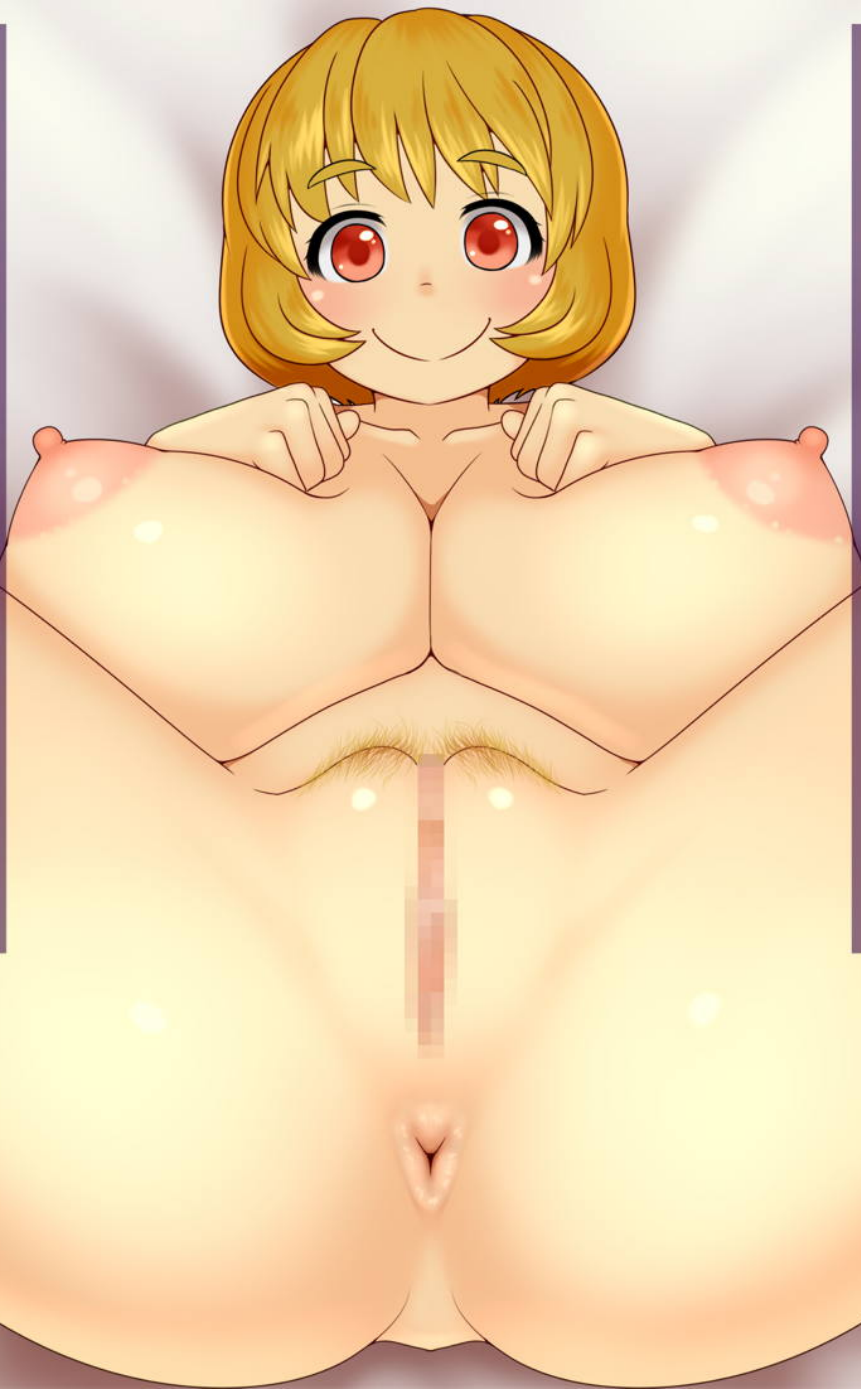


規格外に大きな胸である。
早苗さんや華扇さんも相当大きかったが、
それすら比にならないほどたわわに稔った
爆乳である。
そんな娘から積極的に誘われて、断る男は
貧乳好きだけだろう。
大慌てで首を振り、そんな事は無いと伝えると、
「本当？じゃあ今すぐ準備しちゃうね！」

穰子はすぐに布団を敷き、裸になり、その場に寝転び、足を広げた。眼の前に大きな胸と、それに負けないぐらい大きな尻が目に入る。

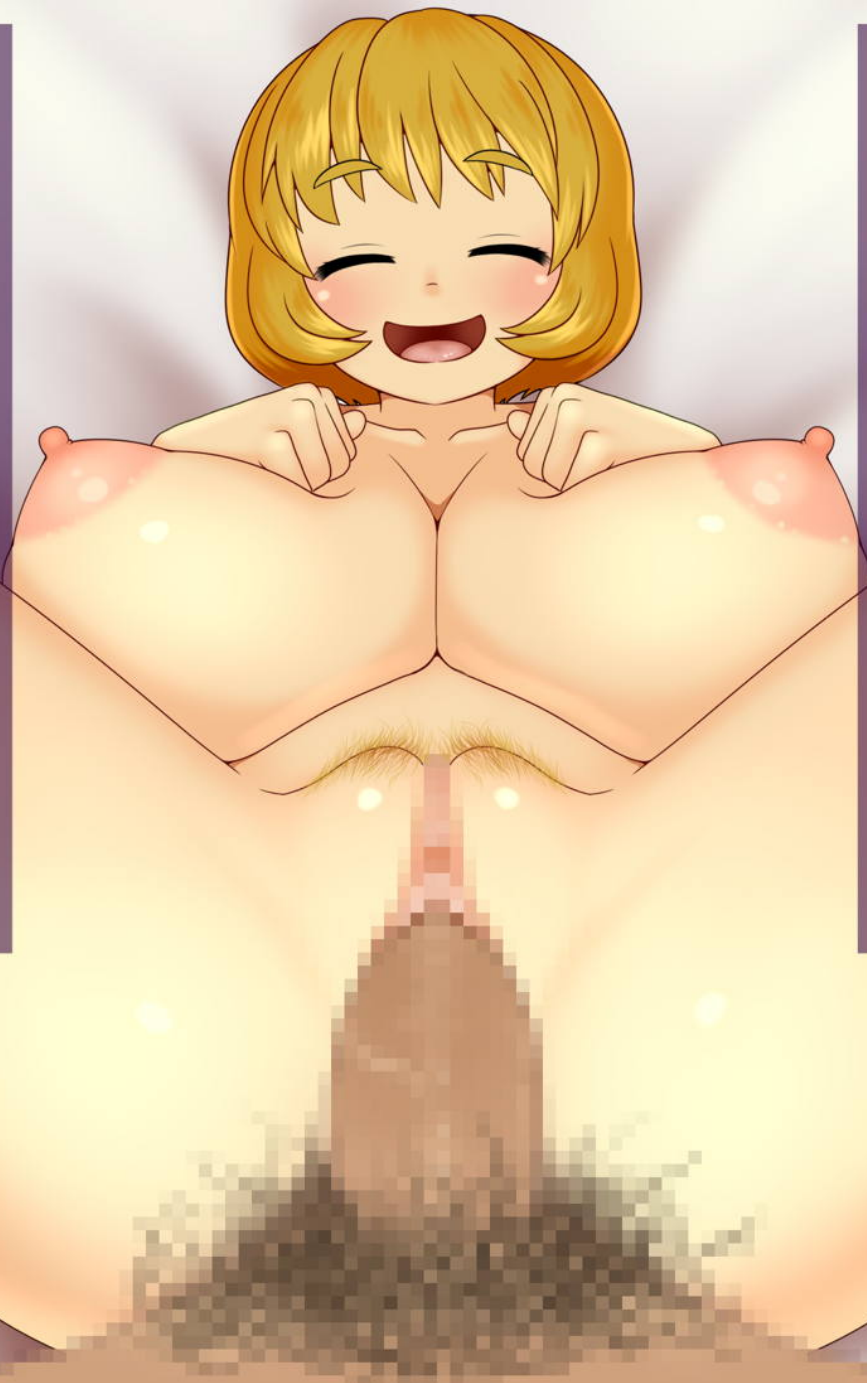
「さ♡どうぞ召し上がれ♡」

自分が出した食事とほとんど同じようなノリで、自らの身体を差し出す穰子。たまらずにいきり立った男根を出し、穰子の秘所へと挿入した。



「うんうん♥食べた後は運動だよね♥
私の中でいっぱい運動しようね♥」
穰子は犯されながら笑顔で告げる。

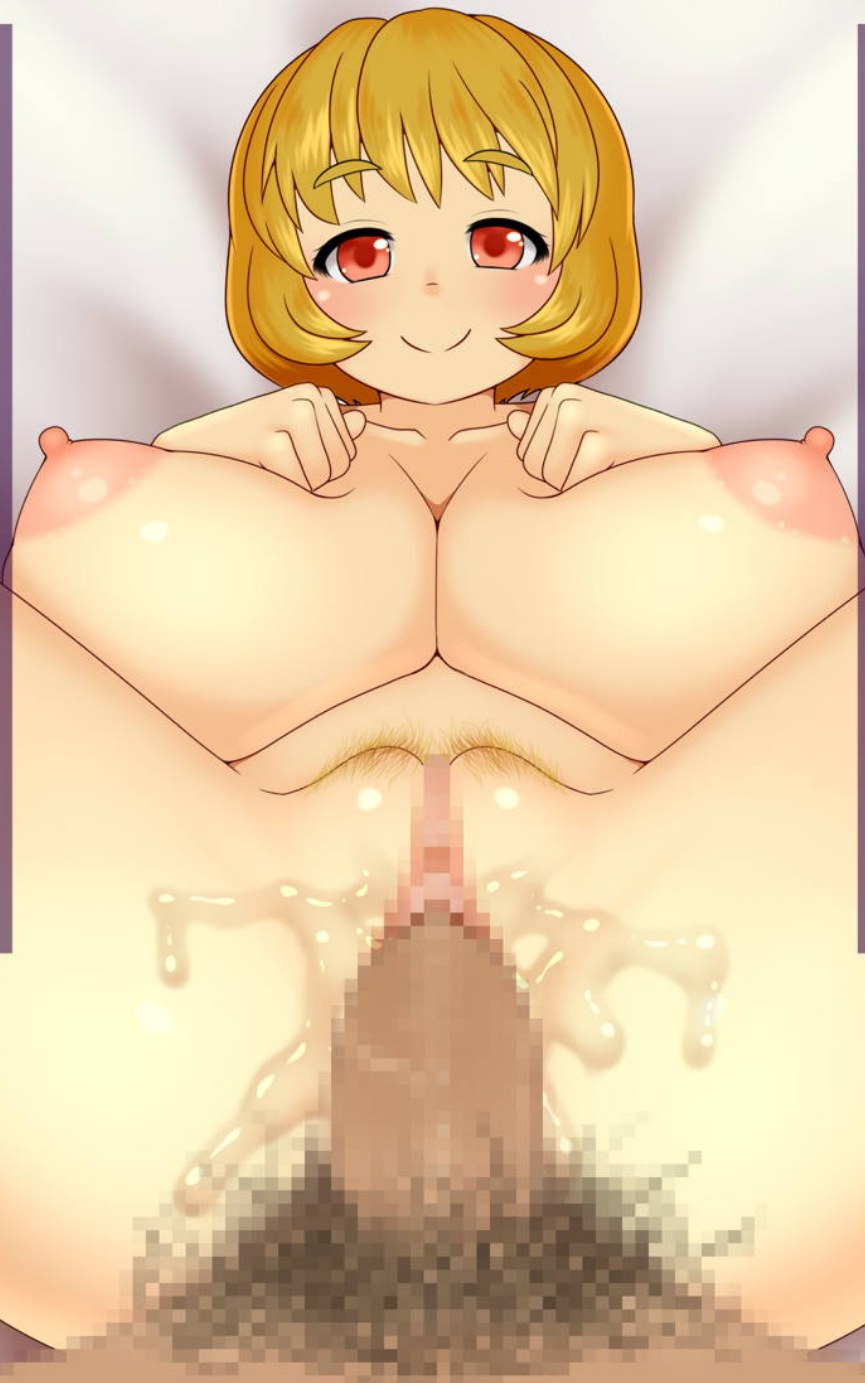
これで中出しされたら自分が孕むという事が
分かっているのだろうか？
そう思える程に穰子は純朴そうな瞳で
自らの結合部を見つめている。




「大丈夫だよ♡なあんにも気にしないで
いっぱい中出ししちゃってね♡
好きなだけ私で気持ち良くなっ
ちやおうね♡」

やがて精子が尿道を登ってくる感覚が
やってくる。もう少し穢子を味わいたくて
ピストンのペースを調整していると…


「めっ♡だよ♡
大丈夫。いっぱい出して♡」






足でガツチリと腰をホールドされ、
思わず穣子の奥まで挿入してしまう。
その衝撃に快感が頭のとつぺんの毛先まで
駆け抜けていき、同時に精液が男根から
溢れ出す感覚を味わった。

「いっっぱい♡いっっぱい出そうね♡」
精液が、穣子の膣内を汚していく。
おそらく子宮にも入り込んでいるだろう。
穣子は射精が続く間、ずっと腰をホールドし、
精液を取り込んでいた。



「いっぱい出したね♡えらいえらい♡」
穰子は精液を全て子宮で飲み込むと、
俺を抱き寄せて頭を胸で抱え込み、
頭を撫でた。

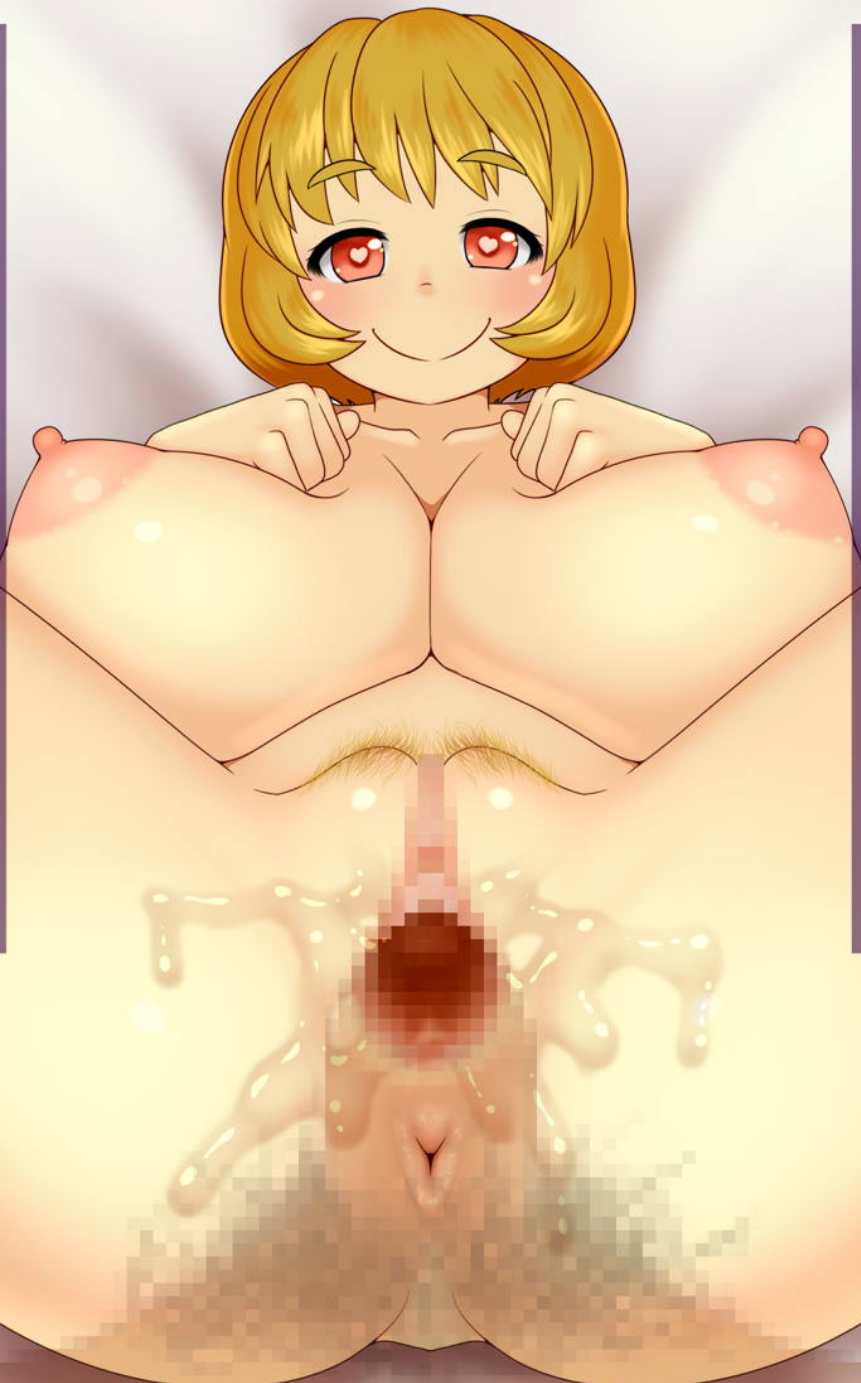
安心感と幸福感に包まれ、
心が落ち着いて来たので
男根を引き抜こうとした所で
自らの身体の異変に気がついた。




男根が全く萎えていない。
それどころか出したばかりだというのに
ギンギンにいきり立っている。
これは…と思いきり穂子を見上げると、

「ね？大丈夫でしょう？♥
私の神力の入ったごはんを食べたから、
精もいっぱいいついてるんだよ♥
これでもっとたくさんえっち出来るよ♥

俺はピストンを再開した。
始めから穠子は自分がこうして犯され、
孕まされる事を計画していたのだ。
純朴な顔をしてなかなかにしたたかである。



「うんうん♥もーっと私の身体を
堪能してね♥無責任な射精もいっぱいして、
パパになっちゃおうね〜♥」
穠子はこの状況を
心から楽しんでいるようだった。



とろけて来た顔の穢子を見ながら、
二度目の射精。
一度目よりも多く出たのでは無いだろうか？
と思うほどの長い射精だった。

出しすぎた精液が穢子の膣で受け止めきれず
結合部から漏れ出した。

穢子は満足そうに笑みを浮かべ、

「よしよし♡これなら受精確実だね♡」
と言いながら、下腹部を撫でた。

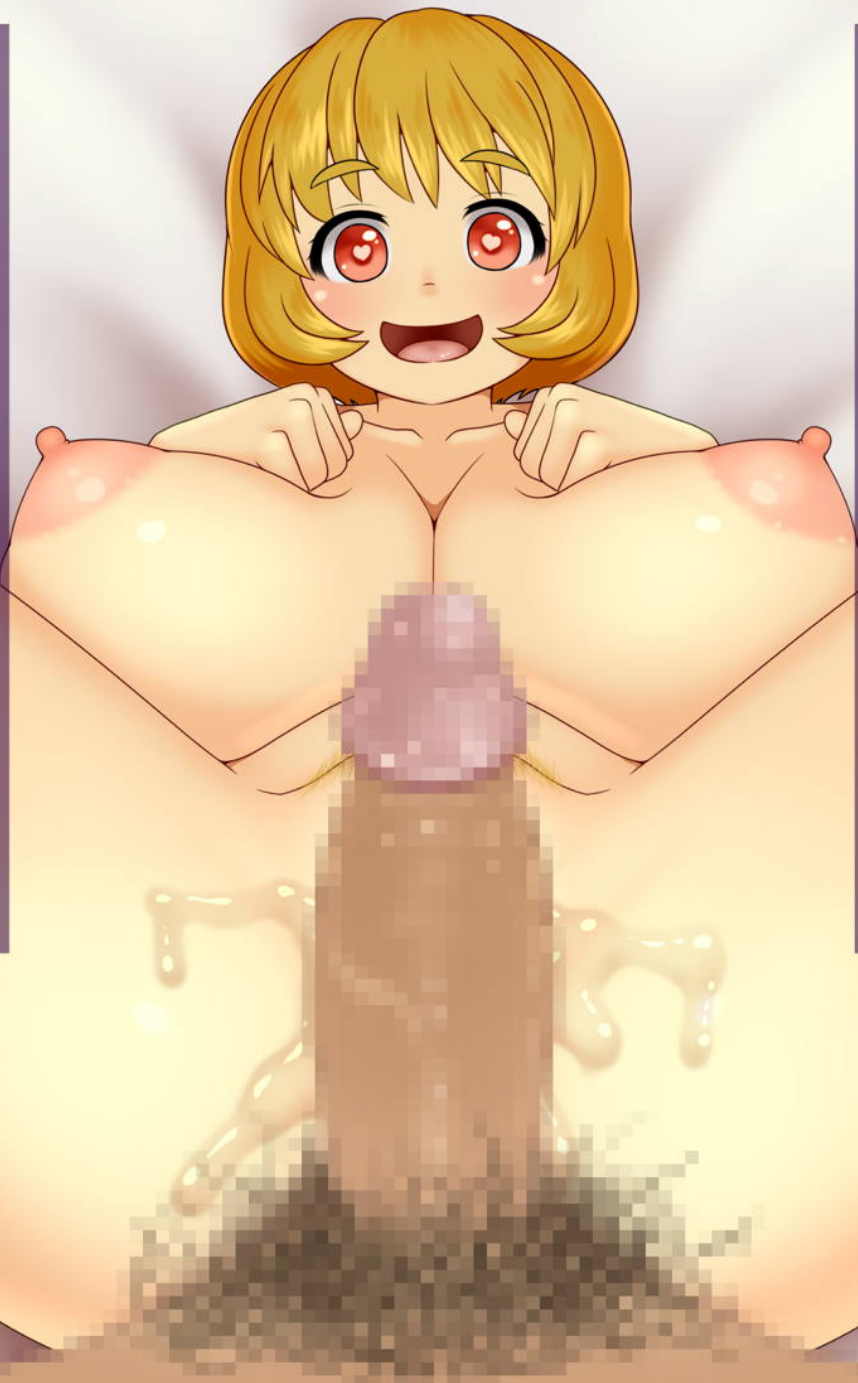
しかし、まだ男根は萎えては居なかった。

「大丈夫♥ 言ったでしよう？」

『好きなだけ』って♥

キミの気が済むまで、いくらでも

付き合っただけからね♥」



穰子のその言葉に、理性のタガが外れ、

獣のように穰子の身体を貪った。

穰子はその全てを笑顔で受け入れていた。

気がつくくと、穢子は気を失っていた。
いったいどれだけだけ出したのだろうか…
シーツはすっかり二人の愛液で
ドロドロになっており、吸いきれなかった
精液が溜まっていた。



流石に男根の猛りも収まり、
性交のしすぎで疲労感に襲われ、
ようやく穢子から男根を引き抜き、
仰向けに倒れ込んだ。

ぼんやりと目を開けると穰子のお姉さんが居た。確か静葉…とか言っていたような…。起きたばかりでボーっとする俺に

「あら、おはようございます。起こしてしまいましたね。すみません」と話しかけてくる。そしてやけに股間がムズムズと……





はっと目を開けると、静葉は俺に全裸で跨がっていた。
男根は静葉に挿入されていて、既に淫靡な音を響かせていた。

静葉は
「どうもおちんちんが勃っていたようでしたので、いただいてしまいました♡」

と優しく笑った。誰とも種付けして良いと言われたが、まさか女の子の方からこうしてくるとは、俺は驚きつつも、心地よくやってくる。静葉は一生懸命に腰を揺らし、精液を搾り取ろうとしてくる。





「どうですか？痛かったりしませんか？」
昨日穰子に言われた事と同じことを聞いてくる。姉妹なのだなあ
この場で関係ない事を考えてしまう。
頷くと静葉は

「んしょっ♥よいしょっ♥」と可愛い掛け声で搾精を再開した。



射精しそうになると、静葉は思い切り腰を落とし、男根を奥深くまで飲み込んだ。快感が股間から頭へと駆け抜けて行き、ドバドバと射精する感覚がやってくる。「た〜くさん出してくださいね♥」
静葉は妖艶な笑みを浮かべていた。

射精し終わると静葉は元通りの綺麗な笑顔に戻り、
「さ、起きてください♥

そろそろ妹がごはんを作り終える頃ですから。」
と、繋がったまま、俺の身体を起こすのだった。



穰子のごはんを堪能してから、二人を連れて外に出た。真っ白な日差しが降り注ぎ、気温は高い。木陰を見つけて座ると、今日はここでしようとして二人に提案した。



「何かと思ったらそういうこと」
「はいはい♥それじゃあ準備しましょっね♥」
ふたりはその場で遠慮せず服を脱ぎ始めた。



二人は裸で寝転がり、
「今日もたくさん中出ししてね♥」
「どちらからしてもいただいても
構いませんからね♥」
と、身体を晒した。
自分の為に女の子が二人も
股を広げて犯されるのを待っている
というとても贅沢な光景だ。



ありがたさに感謝しながら、
まず穰子の方へと覆いかぶさる。
先日のように穰子の膣へと
挿入すると、まだ濡らしても
いないはずなのに男根は
するすると穰子に飲まれていった。
「すっかりキミのちんちんに
慣れちゃったみたい♡」
嬉しそうに穰子が言う。



「良かったわね穂子♥」
静葉も嬉しそうに言う。
静葉の方は、今朝シたからか、
まだ股がしっとり
濡れているように見える。
それとも妹の痴態を見て
感じているのだろうか？



遠慮無く種子の子宮内に射精して、
静葉の方へと移る。
静葉の膣も、この時を待ちわびて
いたかのように、男根を受け入れ
飲み込んでいく。
女の子を軽い気持ちで犯していく
征服感と幸福感に飲まれて、
思い切り腰を動かした。



静葉の子宮内にも射精し、
男根を引き抜くと、膈内から
精液がトロトロと溢れ出てきた。
どうやら今朝シた時の状態
そのままだったらしい。
この娘たちは本気で子供を
作ろうと受精を待っているのだ。



絶対にこの娘たちを孕ませてやる。
そう思い夢中で二人を犯し、
射精し続けた。



おっぱい



「あなた、見ない顔ね。どうしたの？こんなところで？」
人里の川べりに座っていたら声をかけられた。

「道にでも迷ったの？」

自分は外の人間で、ここには女の子に種付けしに来たのだと伝えた。
しかし自分はコミュ障でなかなか声もかけられず悩んでいたのだと。
「あ、あぁ〜。なるほどねぇ〜。そっか〜そんな時期か〜。」



女の子は赤くなり目をそらした。自分もそれを見てバツの悪い感じになっちゃった。実際凄いことを言っているのだ。嫌がる娘も居るだろう。そんな娘に手を出すのもよろしくない。そう思ったのでさっさとこの場を立ち去ろうと腰を浮かしかけた時「じ、じゃあ、私しようか？その、たっ種付け……」

と、赤髪の娘が真っ赤になりながら提案してきた。無理にさせるのもよくない。嫌なら無理にしなくてもいいよと伝えると、



「いっ！いや、別に嫌とかでは無くて！むしろ頂きたいところだけど！別にこのイベントに参加したかったとかそういうのでも無くて！こ、困って…そう困ってるみたいだからやってあげるだけで！」
と、しどろもどろになってまくしたてて来た。
なんだかよく分からないが、嫌で無いのなら…と言うと、赤毛の娘は
「よっ、よし、言質取ったわよ！今から嫌って言っても遅いからね！」
と脅しなのかなんなのかわからない感じで迫ってきた。



「ほ、ほら！こういうの、男は好きなんでしょ？ど、どうよ？」
赤毛の娘は自らスカートをたくし上げると、そう尋ねて来た。
水玉のぱんつが目に入り、思わず凝視してしまう。
「えーっと、脱がしてもいいのよ？」
なんだか微妙に挙動不審な感じが気になるが、言われるままに
ぱんつを脱がせる。名前も知らない女の子とこれからセックスするのだ
という興奮が湧いてきた。



脱がせると目の前にはスジがある。
「あゝゝ♥見せちゃってる…知らない人に私のおまんこ…♥」
自分の恥ずかしい場所を、こんな往來の場所で見せつけ、
興奮しているようだった。
割れ目に触れると、既にしっとりとしていて、指で少し開くと
くちゅりと濡れた音がした。
どうやら露出で興奮する性質のようだった。

「っ♥うあっ♥ちよつと…触ってばかりいなくてあんたも出しなさいよ」
赤毛の娘はそう言うのと、相手のズボンのチャックを下げ、いきり立った
一物を取り出した。

「んん♥良いわね？私がヤっちゃっても♥もう嫌って言うっても
やめてなんてあげないけど♥」
そう言っつて自ら男の一物を自分の膣内へと挿入した。



ぐじゅりと音を立てながら、しかし驚くほどすんなりと、彼女の膣は男の一物を飲み込んだ。早々に奥の奥まで挿れきってとても満足そうな表情をしている。

「はぁ〜〜〜みんなも見てる所で男とセックス…♥」

彼女はすでに自分が作り上げたシチュエーションに飲まれているようだった。

すぐに上下に動き始める。





「あつ♥良いちんぽだ♥気持ちいい所に当たる♥」
「どうやら一物もすっかり気に入ってもらえたようだ。
夢中になって腰を降り出した。
こちらは座っているだけだというのに、勝手に気持ちよくなってくれる
のだから、これほど楽なものもない。おまけに中出しもし放題なのだ。
彼女の快楽に溺れる様を下からじっくり眺め、
キリの良さそうなところで腰を掴み、思い切り下に引き下げた。」



「おっ?ぐううう」
娘が達すると締め付けが急に強まり、彼女の膣に流されるまま射精した。
「おっ♡……おおっ♡……急に……♡ひっ♡挿れるなんてえ♡」
すっかり夢中になっていた娘は驚いたようだったが、
下からもう一突きしてみると、
「おひゅっ♡まっ♡待つて今イってりゅ♡」
とても嬉しそうだったので、更に突いた。



「あひやいつ♥おっ♥まっ♥こんにや所で♥
イグツ♥イぎ顔♥晒しちやってるゆお♥♥♥」
という言葉最後に、とても良い顔をしながら気を失ってしまった。
しまった。やりすぎてしまった。
やめると言った時点で止めておくべきだったのかもしれない。
仕方なく、彼女を横に寝かせて起きるのを待つことにした。

「あっあなたが悪いんだからね！」
彼女は起きてからプリプリと怒ってきたが、本当にこちらが悪いので
素直に謝る。

「ちゃんと中出ししてくれたみたいだから良いけど。

この責任はちゃんと取ってもらおうからね！

今日の夜、またココに来るように！」

と言うだけ言って去ってしまった。





夜の人里――。

街灯もなく、月明かりも暗めなせいで雰囲気は昼間と全然違っていた。外の世界ではもはや考えられない光景。

町並みも古いせいで、タイムスリップでもしたかのような感覚が、一層強くなる。そんな中ようやく昼間に居た場所までやってきた。

「ようやく来たわね。」

後ろから声がかかる。昼間と同じ声。間違いなく赤髪の娘だ。

「さあ、責任とってもらおうわよ。」
声の方に振り向くと、すごい光景が待っていた。
裸の女の子である。昼間の娘が、裸で立っていた。
身体には大きく♡♡と描かれており、膣の方に↓が伸びている。
露出癖があるとは思っていたが、まさか露出狂の方だったとは…。
しかし暗がりにもその肌はよく目立ち、娘の身体を明確に浮き立たせる。
すっかり魅入っていると、





「あんたには私の趣味に付き合ってもらわうわよ。
……あんなに気持ちよかったの……初めてだったの……。
こんな人里のど真ん中で、誰かが見てる中で、
男と種付けセックスするのが……！」
そう言って覆いかぶさってくる。
「責任とって、私をあんたのザーメンタンクにしなさい♡」

赤毛の娘は遠慮なくジツパーを下げ、一物を取り出すと前戯も無しに自分の秘所へと突っ込んだ。

「ああ♡好き♡やっぱりあんたのおちんちん好き♡

ね♡またいっぱい種付けしてね♡お腹いっぱいにしてね♡」

熱烈なコールを続けながら、赤毛の娘は大きく腰を降る。

昼間のアレによほどハマってしまっただらしい。





娘の腰を掴み、まるでオナホのように思い切り腰を落とさせる。

「つつひいっ♡♡これっ♡これ好き♡♡」

もっ♡もっ♡として♡」

要求されるがまま、彼女の腰を何度も落とし、同時に突き上げる。

乱暴にすればするほど、彼女は悦んだ。

「おっ♡おほっ♡おおっ♡おうっ♡」

彼女の口からおおよそ女の子が出すものでない喘ぎ声が発せられる。

勢いに任せて射精すると、彼女は大きく痙攣しながら達した。

「~~~~~♡♡♡♡♡」

射精が収まっても、彼女の膣は貪欲に男根を刺激し、精液を根こそぎ奪い取ろうとしているようだった。

「もつと♡ちようだい♡」

彼女もそのつもりのように、すぐにピストンを再開した。





「うっ♡うっ♡うっ♡うっ♡うっ♡うっ♡うっ♡うっ♡うっ♡」
最早まぐわうことしか考えていないような、メスの矯正が人里に響く。
どれだけこの時間が続いたろうか。
イキすぎて彼女の意識は朦朧としており、何度も射精した結果、
彼女の腹は膨れていた。こちらも限界である。
それでもお互いセックスをやめようとはしなかった。
彼女は本当にザーメンタンクになっちゃった。

「うっ♡♡♡」

最後の射精が終わると、彼女ももう限界だったようで、繋がったまま腰を落として動かなくなった。

「……はーはーはー♡……はーはーはー♡」

本当にクタクタになってしまい、お互い言葉も交わさず、暫くそのままだらっとしていた。



「……私、赤蛮奇っていうんだけど……」

赤毛の少女が思い出したように自分の名前を名乗った。

「また、シてもいいかな？」

と聞いてくるので、快い返事を返した。

どうやら自分もこの娘との交尾にハマってしまったらしい。

「えへへ♥」

満足そうに笑った赤毛の娘の膣から、ごぶりと精液が溢れ出た。













おまけ





おまけ





おまけ









「本日は無理言って来ていただいております。
このタイミングでどうしても私も子作りしないといけなかったのです。
どうかこの阿求に子種をたくさんいただけると嬉しいのですが……」
突然連れ込まれた大きなお屋敷の中で、阿求と名乗った少女は
大きく自分の秘所を見せつける形で寝転がっていた。



「なにぶん身体が弱いものですから、あまりお屋敷から外に出られないのです。このような私ではあまり殿方にご満足いただけるか分かりませんが……」

遠慮がちに言うが、彼女の身体はかなり豊満だ。胸は大きく、尻の肉付きも申し分無い。肌も健康的な色で、彼女の顔が童顔であるアンバランスさが、逆にこの光景を卑猥なものにしていた。





「あ♥おまんこ見られるのですか？どうぞ♥広げて見てください♥」
思わず吸い付けられるように阿求の秘所を広げた。
彼女の綺麗な膣内は淫靡に男を受け入れる準備をしており、
かなり子宮が降りてきて居るのが分かる。受精する準備も万端のようだ。
「どうでしょうか？霊夢さんや仙人さまには劣るかもしれませんが…」

阿求は自信無さげに苦笑しているが、そんな事はもうどうでも良かった。
バキバキに怒張したモノをズボンから放り出すと、

早速阿求の上に覆いかぶさった。

「まあ♥子種をいただけるのですね♥ありがとうございます
至らぬ身体ではありますが、存分にお使いくださいますませ♥」



身体が弱いと言っていたので、ゆっくりと男根を挿入する。
先っちょだけしか入れていないにも関わらず、阿求の膣はペニスを
歓迎するように吸い付き、我慢できないときでも言わんばかりに
うねって挿入を促す。



半ばまで入れると、先程広げた時に見えていた子宮口にたどり着いたようだった。阿求は男根が奥までたどり着いた事が分かり、「す、すみません…。半分しか入りませんでしたね…。」と詫てきた。いちいち気にする娘だ。身体が弱いせいだろうか？ともかくお互い遠慮したままでは楽しくない。ピストン運動を開始した。なんとか打破出来ないかと思ひ、ピストン運動を開始した。



阿求の膣内は思った以上に狭く、引き抜く動作の度に、まるで「行かないでくれ」とでも言いたげにペニスに吸い付いてくる。そのせいか、突き入れる時にかなり強めに挿入してしまおう。その度に阿求の、年の割に小柄な身体が大きく揺さぶられ、大きな吐息が漏れた。



「ふっ♥だんだんっ♥奥まで♥入るように♥なってきましたね♥」
嬉しそうに阿求が言う。膣内が性交によりほぐれてきたのだ。
気になっていた事が一つ解消されたようで、性交中だというのに
安心した表情をしている。

「出したい時は♥いつでも出して♥構いませんからね♥
でも♥必ず一番奥で♥お願いしますね♥」



女の子から安心した表情で中出しを要求されては、
もう何も遠慮するようなことは無かった。
男根を奥の奥まで挿入し、思い切り精を吐き出す。

「~~~~~っ♡」

阿求は突然やってきた膣内射精の快感に、軽く達したようだった。



射精しきってから男根を引き抜くと、彼女の小さな膣内からはすぐに精液が漏れ出した。

「あ……♡」

阿求はその光景を見て少しの間うっとり余韻に浸っていたが、やがて男根がまだ元気そうであるのを見ると、



「す、すみません。ご迷惑でなければ……その……」
と遠慮がちに言ってきた。なにを言いたいのか判断出来ずに居ると、
「……もつと、お願いします♥」
再び性交の提案をしてきた。
阿求の気の済むまでしてやろう。そう思い再び挿入を開始した。





数時間後

「もっとお願ひします♥もつとザーメンください♥」
阿求の性欲は底なしだった。あれからずっと性交を続けているが、
中に出す度にもつともつとせがんできた。
不思議なもので、自分も何度も射精しているのに萎える事がない。
身体の相性が良いのか、阿求のしわざなのか、分かりはしない。



ただ言われるまま性交し、射精し続けた。

「あ♥また出てますね♥もう覚えましたがよ♥あなたの弱いところ♥阿求の膣内は始めの頃のしおらしさ(?)が

嘘か猫かぶりであったかのように、男の精を搾り取るだけの

魔性の蜜壺になってしまった。

「もつとくださいね♥あなたの精子で絶対孕んでみせますから♥」



もしかしたら身体が弱いと言うのも嘘だったのでは？
そう思うぐらい豹変した彼女は、子宮が精液でいっぱいになっても
もろともせず、気持ち良いほどの笑顔で性交を続けた。
子宮内の卵子が、数多の精子を受け入れ受精する音が
聞こえた気がした。





おしまい